

中世エルベ川流域における円村と袋小路村について

——ヨーロッパ村落の広場——

水 津 一 朗

【要約】ヨーロッパにおいては、広場は都市だけでなく、しばしば村落にもみられる。ところでエルベ川流域には、入口が一つしかない行詰りの内部空間をもつ円村と袋小路村が多い。これらの研究史をひもとくとき、スラヴ族起源説がつねに底流をなしている。しかし北欧やイギリスの事例を加えた形態発生学的研究の結果、①その原初形態は、数戸の屋敷が弓状ないし半円状の空間の傍に立地し、まわりに柵をほどこした小村であり、②その垣内空間は、防禦と夜間の家畜の保護のため、放牧の世界には不可欠のもので、③かつてはスラヴ族居住地方だけでなく、少なくともヨーロッパ各地にひろく分布したことが判明した。

この小村が、円村や袋小路村へと発展する契機は何であったか。従来あまり考慮されなかったことであるが、ここで私は、村落モデルに対応する都市モデルの存在が一般に予想されることに着目した。①エルベ川流域の円村や袋小路村には、封鎖的で不定形の広場をもつ一二—一三世紀以前に成立したブルクなどの小都市と共通するモチーフがあるが、他方、②オスト・エルベでは、アングルドルフやシュトラークセンドルフが、同じ一三世紀頃に成立した創建都市と幾何学的なデザインを共有する。また③円村や袋小路村には、アングルドルフやシュトラークセンドルフにみられる規則正しい三圃農法の行われた事例に乏しい。したがって④前者は、後者に先行するモデルプランに基づいて成立したことが推定される。日本にはフレムトな種々の村落広場は、農牧混合的世界に内在する要求と、ローマンタウン以来の都市広場のモチーフの結合として成立したもので、さまざまな村落の核となった。

史料 五三巻六号 一九七〇年十一月

一、はじめに

日本には、歴史的な公共広場がない。地上と地下におけ

る都市広場の新設が問題になる昨今、ヨーロッパの歴史的都市における広場が、あらためて論議の対象になってきた。

ヨーロッパ都市の広場は、聖堂広場であれ、市場広場で

あれ、中世以来の由緒ある堅い石造建築にとりかこまれて
いる。それらは街路とともに、緻密な計画にもとづく平面
形態をとることが少なくない。建築史的研究が示すように、
有機的、あるいは幾何学的な、さまざまな形態をとるその
プランの中には独自の合理精神がたらぬいている。また広
場に通じる狭い折れ曲った小路に至るまで、ユニークな美
的・心理的效果がひそむ。わが国などには本来異質の市民
精神も、ヨーロッパではこの広場でつちかわれ、ねりあげ
られたということができであろう。

それは壮大な都市壁とともに、古代地中海世界のフォー
ラム Forum にその直接の原型をもつ。ガリアやライン・
ドナウ流域の古代ローマ都市はいったん荒廃したが、フラ
ンク時代以降、そのプランを母胎に中世都市として再生し
たものが少なくない。さらにリメスの彼方に新しく創建さ
れた中世都市の中にも、旧ローマ都市のプランを借りたこ
との明らかなものがある。ルネッサンスやバロック都市の
プランも、基本的には古代地中海以来の伝統をうけつぎ、
しかも各時代の要求に応じた合理化と幾何学的な秩序化を
企てるものであった。

しかしヨーロッパにおいては、広場は都市だけの専有物
ではない。現在の研究成果によると、広場状の内部空間を
もつ村落も、後述するようにかつてはひろく各地に分布し
ていた。わが国にはフレムトな広場が、ここでは都市・村
落を通じてかなり一般的な存在であるとすれば、両者の広
場を個別に研究してきた既往の集落地理学の立場をこえて、
ヨーロッパ独自の都市・村落関係の網目の中で、これらの
広場を総合的に再検討する必要があるのではあるまいか。

こうした研究によって、はじめてわが国などとはちがうヨ
ーロッパの地理的個性の一端を、より具象的に示すことが
できるように思われる。それはまた、日本集落のグロビー
ルな意義づけにとっても有力なアンチテーゼとなるもので
なければならぬ。

エルベ川以東のドイツ内陸植民が行われた地方には、方
形広場と、そこに教会・刑場・会所・鐘楼・水汲場など多
くの公共施設のあるアングルドルフ Angerdorf、ないし長
方形広場が街路状にのびたシュトラッセンドルフ Strassen-
dorf が分布する。かつてベルリンを訪れたさい、新市域の
各所に円形や長方形広場のあとがなお街区の中心としてそ

の痕跡をとどめているのに一驚したことがあった。^①

ところで私は、これらの計画的な村落形態の母胎が、早くから土地占居の密度の高かったエルベ川以西の、たとえばライン・ドナウ流域にみられることを推定し、さらにこれらのプランを幾何学的なデザインのもとで大規模に刻印したもののこそ、一三世紀以降のオスト・エルベをはじめとして、ミッドランドや東スウェーデンにまで分布した広場村であると断定した。^②

しかしこれらの推論は、かならずしも各集落形態の研究史とそのこまかい検討の上に組立てられたものではなかった。本稿では、現地の一部を踏査する機会にめぐまれたエルベ川流域について、この地方にかたまって分布する円村 Rundling と袋小路村 Sackgassendorf に焦点をしぼり、ひとまずその研究史を整理することから出発したい。これらの村落は、アングェルドルフやシュトラッセンドルフより一まわり小さく、本来、行詰まりになった不完全な円形や小路状の内部空間をもつが、これらの平面形態もわが国にはほとんど類例がない。いかなるヨーロッパ的特性が、そこにはひそんでいるのであろうか。

① Hofmeister, B.: Die Angerdörfer im Raume von West-Berlin, Beispiele für die großstädtische Überformung ehemaliger Dörfer. Ber. z. dt. Landschaft, 26, 1960.

② 拙稿「農地と集落」(拙著『社会集団の生活空間』所収)。

③ 拙稿「中世ヨーロッパにおける村落と耕地について」(『京都大学文学部研究紀要』第一〇号)。

二、第二次世界大戦以前の研究史

円村研究に先鞭をつけたのは、前世紀のヤコブ・V. Jacoby によるリュネブルク Lüneburg とアルテンブルク Altenburg 地方の調査であった。^①

氷河地形とハイデのひろがるこの地方に特異な景観を刻みこんでいる円村をもって、かれは唯一つの入口しかない多少とも規則正しい円形広場のまわりを馬蹄型状に屋敷がとりまく村落であると規定した。さらに遊牧から定着への変化のさいに共同生活の必要から考案された円形テントに似た居住プランを想定し、この円形の空間と屋敷まわりの柵によって、人畜ともに外敵から守られたことを、この村落の起原とみなしている。なおかれは円村がスラヴ地名をもつとして、「スラヴ的円村」slavisches Runddorf の用

語を使っているが、円村民族起原説の实のない形式論に終始することなく、円村のありのままの形態と機能を素直につかんでいるのが注目をひく。

かれは、ハンノーヴァ付近の不毛な、人口の少ないモレーン地方の円村退化型からおして、この円村の原初形態を二、三の屋敷が半円状や鋭角状の輪郭をえがく小村であるとしているが、この見解は後にクレンツリン A. Krenzlin にうけつがれる。また、とくに円形広場はないが、行詰りの内部空間 *Sack* をもつ袋小路村を円村の変形とみなし、両村落の間に関係のあることを指摘しているのも、現在の学説に近い。

その後マイツェン A. Meitzen はヨーロッパの全村落形態を組織化し、二〇世紀の村落研究に礎石をきづいた。^②しかしかれが、古地籍図から広場のある村落がデンマークや東スウェーデンにも分布したことを確認しながら、これを別系統のものと考え、本地域についてはヤコビ説をうけつぎ、円村やその他の広場村のスラヴ族起原説を強調したために、円村のイメージに「特殊な産物」としてのゆがみをもたらえたことになったのは否定できない。

集落形態発生学の成立

シュリーニーターは一九〇三年、「円状にとざされた形態をもつ村落」のグループに、「純粋な円村」のほか、「円村に似た村」や「広場村」*Platzdorf* を含める一方、袋小路村は列村 *Reihendorf* やシェトラーセンドルフとともに「一方向にひろがった村落」の一種とみた。^③円村と袋小路村との中間形態のあることは認めたが、しかし前者では広場、後者では小路 *Gasse* が村落形態の決定的契機であるとして、両者をはっきりと別のグループに区別している。

集落形態発生学を体系化したのはかれであるが、その形態分類は形式論にとらわれるところが多く、たとえば円村と袋小路村との峻別などは、発生学的考察に混迷をあたえるものになった。しかし北東チャーリングゲン地方の詳細な实地調査にもとづいて、その地方の円村が中世のスラヴとゲルマン族の境界地帯に分布し、かつそこにドイツ地名が多い事実をつきとめ、「純粋な円村」はドイツ人によってスラブ地方に導入された計画村落であるとし、かつその前形態を古い西ドイツなどに多くみられる「規則性に乏しい広場村」としたのは、研究史上大きい前進であった。ただ

「規則性に乏しい広場村」の概念は不鮮明であり、現在の研究成果からすれば、当然袋小路村や古い小村などの関係が明らかにされなければならない。

その後、ヴェチケ J. Wutschke やヘンリヒ Hennig などによって、いよいよエルベ川流域の研究が本格化する。^④二七年にはミールケ R. Mielke が、円村を民族移動時代この地方に住んでいたスエビ Suebi 族の経済的必要性から発達した村落とみ、後にこのプランを、スラヴ族の移住者たちがうけついだと考えた。^⑤しかし円村は、スエビ族の拡がった地方にだけくまなく分布しているわけではない。

フォルカース J. Folkers も円村とスラヴ族との関連を否定しているが、かれの論拠は、円村の分布範囲が南スウェーデンや東フリースランドにまでおよび事実におかれた。^⑥後述するように、この事実は広場をもつ村落の意義づけにあたって注目すべき内容をもっているが、マイツェン以来積極的には評価されなかったところである。ゲルマン族にとって円村がフレムトなものでなかったことを証明するために、ヴィッセン Witzén やシュタルゲッデル Stagedel 近傍の環城壁にかこまれた円形小村遺跡のほかに、クルム

ヘールン Krummhörn 半島の盛土村 Wutendorf まで円村に加え、かつ西ドイツの古い塊村にもかつて広場のあったことを証明しようとして、「分割によって失われた」旧広場の復原をこころみた。すぐれた着眼ではあるが、その円村概念は広場村一般と同義で、シュリューターの一規則性に乏しい「広場村」とともに広場の内容がはっきりしない。しかし盛土村は、早くヤコビによって本質的に「スラヴ的円村」とは区別すべき形態とされたが、形態上では円村に近似するし、ニーダーゲーストでは盛土上の微高地にある円村も少なくない。したがって、フォルカースの見解のすべてを概念の拡大と断定すべきではない。

当時なお、円村や袋小路村がエルベ川流域の旧スラヴ族居住地域にとくべつ多いという事実への拘泥は根強く、民族起源説が霧散したわけではなかった。こうした状況下で、マルティニー R. Martiny は二八年、一つの整理をこころみた。^⑦かれは東ドイツの村落形態に「相互におどろくべき強い類似性」のあることに着目して、これらの諸形態の成立について組織だった解釈を下している。まず円村を円形広場村 Rundplatzdorf と同視して「城壘によって狭隘化

した町」とみなし、これを一つの極として、内部空間の形態変化をもとに、他の極である小路村 Gassendorf や袋小路村に至る発展系列をあげている。これらの村落には、その形態からみて、また各家が規則正しく立地している点からみて、発生的にはスラヴ的支配の原理が働いているとし、成立時期は八世紀末から西スラヴ族がエルベ川左岸に進出したときで、それはまず規則的な円形広場村の形で始まり、一二世紀のドイツ植民の反撃によって終わると考えた。しかし円形広場村の概念には、円村以外にも円形広場をもつアンゲルドルフ Rundangerdorf などを含む危険があり、この用語も発生学上の混乱のもとになりかねない。

マルティニーとシュリニーターの円村の評価は、対照的である。円村をマルティニーは形態発展の系列における出発型とみたのに対して、シュリニーターは最終型としているが、両者の依拠する事実や形態規準には、くいちがいが少なくない。しかしシュリニーター自身、「規則性に乏しい広場村」から「純粋な円村」への発展を認めているし、この広場村の概念自体、円村や袋小路村と本質的なちがひがあるわけではないから、「両者の見解には意外な共通点がある

ひそんでいるのも事実である。したがってさらに多くのフィールドに即して、厳密な形態分類と精緻な発生学的考察が必要な状況であった。

円村と袋小路村の漸移形態

マイツェン—グラーートマン R. Gradmann とつづく「塊村古代成立説」を否定して、西・南ドイツにおける村落形態発生学の研究成果をもとに、塊村の前形態として散村や小村を認める学説がしだいに注目をひくに至ったのも、このころからであった。

ところで本地方についてみると、塊村は、円村や袋小路村の分布領域の南につづく、占居の古いハルツ前地のレス地方に多い。ゲブラー E. Gäbler やマスベルク K. Masberg は、ブラウンシュヴァイヒ地方の塊村を調査して、その原初形態として袋小路村を復原した。⁽⁸⁾⁽⁹⁾ その本質的特徴は、入口が唯一つしかない袋状の内部空間にあり、その空間が分化して、はじめて多様な袋小路や広場状の内部空間のできることを実証した。早くシュリニーターによって着手されたことではあるが、円村や袋小路村の分布領域の外方にひろがる塊村の前形態をさぐる意義は十分に評価されるべき

であり、マイツェン以来の「形態の固定性」についての意見を具体的にこえるものであった。この方法は、後述するように戦後エヴァースにうけつがれる。

三一年には、クレンツリンの研究成果が公刊された^⑩。すでにヤコビによって先鞭をつけられたハンノーヴァのヴェントランドのフィールドについて、新しい見地からこころみられた研究である。

クレンツリンは、円村の分布がスラヴ人（ヴェント人）のすんだ痕跡のはっきりしたところと重なること、その農地制度が比較的単純であること、村落形態の封鎖性からみて防禦機能が認められること、その立地点が低地の中央であることなどを明らかにした上で、これらの「純粋な円村」を、後述する「不純な円村」から区別した。前者の形態上の特徴としては、内部空間に円状の広場があり、そのまわりに屋敷が扇形に立地し、狭い入口が一つしかないこと、各戸は広場に切妻をむけており、完全持分数は6フーフェ以下の小村であることがあげられる。村落は、交通路とは反対側の、農地のある微高地からやや離れた低地に立地し、まわりは草地で、各農家の背後にはグラスホーフの

区画が続くという。

「不純な円村」のばあい、内部空間は前者より小さく、蹄鉄状、または長い形態をとり、屋敷は微高地に近く、農耕地が屋敷までのびているので、グラスホーフはしばしば低地に向ってたちぎられている。この村落は新しい成立になり、明らかにドイツ植民に由来する。これら二種類の円村より一だんと新しいのが、袋小路村である。これもヴェントランドに多く分布し、スラヴ族との関係は否定できないが、成立したのは一三—四世紀である。形態的には円村と区別のつかないばあいもあるが、おそらく発生的には、封鎖的な円村が、拡大の可能性をもつ列村のプランと結びついたものであろう。さらに不毛なモレン上には数戸からなる「半円村」Halbrunding がみられる。

クレンツリン説は、ヤコビ説を掘りさげ、さらに科学的な実証を加えたもの。しかし上述の各形態間にはさまざまな漸移形態があり、かついずれの形態ともよく似た成立様式をもつように考えられるばあいも少なくない。「純粋」と「不純」の伝統的な分類も、どこまで本質的な意味をもつのであろうか。

三六年にはヘンルト W. Ebert が、「本質的に類型的」な観点から既往の形態概念の整理をこころみた。^① 一部に難解な分類を含むが、新しい研究の進展をめざしたこの意図には、十分にくむべきものがある。袋小路村は、一端が行詰って交通遮断的、かつ列状の形態。円村は、円い屋敷広場で封鎖された広場村状小形態 Platzdorfartige Kleinform。両者の漸移形態にあたるのが、円村的な封鎖性をもち袋小路村。さらに円形の輪郭をもつ村落として、円村以外につきの三形態をはっきり区別している。円形小村 Rundweiler は、円形のとちやれていない場所にまばらに立地した屋敷群。円形広場村 Rundplatzdorf は、屋敷が大きい内部空間の周囲に配列された大型集落。円形列村 Rundreihendorf は、屋敷がとくべつの広場をもち、円状の列にならび、それに連続する紐状耕地をつけた村落。しかし、このような分類が十分な研究効果を發揮するのを待たずに、ドイツは悲惨な大戦にまねこまれていった。

- ① Jacobi, V.: Slawen- und Teutschum in cultur- und agrarhistorischen Studien zur Anschauung gebracht, besonders aus Lüneburg und Altenburg. Arch. f. Gesch. u. Verfassung d. Lüneburg, 6, 1. Abt., Celle 1858

- ② Meitzen, A.: Siedlung und Agrarwesen der Westgermanen und Ostgermanen, der Kelten, Römer, Finnen und Slawen. I-III u. Atlasband Berlin 1896.
 ③ Schlüter, O.: Die Siedlungen im nordöstlichen Thüringen. Berlin 1903.
 ④ Wutschke, J.: Beiträge zur Siedlungskunde des nördlichen subherzynischen Hügellandes. Halle a. S., 1907.
 ⑤ Mielke, R.: Siedlungskunde des deutschen Volkes. München 1927.
 ⑥ Folkers, J.: Das Bauerndorf im Kreise Herzogtum Lauenburg. Ratzenburg 1928.
 ⑦ Martiny, R.: Die Grundrißgestaltung der deutschen Siedlungen. Pet. Mitt. Erg. H. 197, 1928.
 ⑧ Gäbler, E.: Das Amt Riddagshausen Nieders. Jahrb. 1928.
 ⑨ Maßberg, K.: Die Dörfer der Vogtei Groß Denke, ihre Flurverfassung und Dorfanlage. Stud. u. Vorarb. z. Hist. Atlas Niedersachsens. H. 12, Göttingen 1930.
 ⑩ Krenzlin, A.: Die Kulturlandschaft des hannoverschen Wendlands. Forsch. z. dt. Landes- u. Volkskde., 28, 1931.
 ⑪ Ebert, W.: Ländliche Siedelformen im deutschen Osten. Berlin 1936.

三、内部空間の原初形態と機能

——第二次世界大戦後の研究史——

五〇年代になると、第二次世界大戦の混乱を脱して、

たたび円村研究の諸成果が公刊されはじめた。そこにはよりひろい視野と精緻な分析法をもって、戦前の研究水準をはるかにこえるものがあつた。他地方の村落や農地の形態発生に関する研究成果からおして、この地方の村落形態の地理学的位置づけについて新しい見透しがえられるようになったことも、大きい進歩であろう。

ただし村落と農地形態の対応関係については、本稿では割愛して論を進めたい。

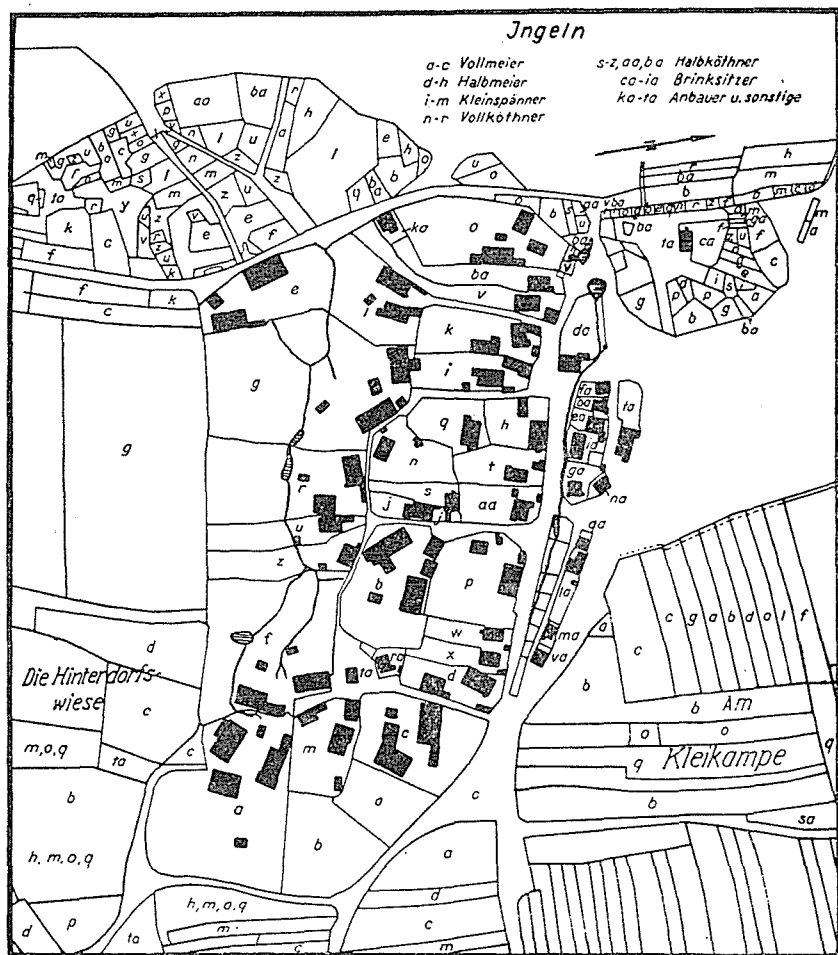
内部空間の機能

五二年には、エルベ川東方の内陸植民地方についてクレンツリンの研究成果が公刊された。^①もはや三一年の円村スラヴ族起源説は影をひそめて、つぎのような新見解が表面にあらわれたのが注目をひく。

初期ドイツ時代にスラヴ族が居住していたところには、いたるところに一列に屋敷の並んだ列状小村 *einreihige Zeilen* や袋小路村が多い。しかも両者には中間形態が多いことからして、列状小村から袋小路村や、さらに円村への発展があつたと考えられる。スラヴ族の小村落が集つて円村が形成されるにさいして、とくに好都合だったものとし

て共同で経営される三圃農業の導入があつた。三圃農法のない砂質モレーンでは、円村の形態も不完全である。以上のように、円村形態以前に小さい列状の家並みをおき、その発展形態としての袋小路村や円村の成立を農業集約化と関連せしめたクレンツリン説は、つぎのエヴァース説とともに、円村研究に機能的視点を加えたものとして大きい意義をもつ。ただすべての円村地域での三圃農業の存在については、なお疑点が少なくない。

この研究とあい前後して、戦前のマスベルクの方法をうけつぐ袋小路村に関するエヴァース *M. W. Evers* の新見解が発表された。^②この研究は、ヒルデスハイム・マリエンブルク地方の一九世紀の地籍図上に認められる塊村を分析して、そこに不整形な袋状の内部空間をもつ古い村落形態を復原したものの。たとえば、高度九〇メートルの台地面の平たい凹地に立地したインゲルン *Ingeln* 村は、主要交通路からはずれた塊村。一八四二―四三年の地籍図上には、村道とは直角をなす数本の狭い小路が認められるが、ほとんど南端で相互に結ばれている。しかし南端を結ぶ道路はもともと足踏道にすぎなかった。したがって数本の狭い小



第一図 ヒルデスハイム、インゲルン村の地籍図（1842—43年）

路は原初的にはそれぞれ袋小路であったのではあるまいか。中でも最古の集落部分と考えられる完全マイエルMeier a・b・cの屋敷でかこまれた内部空間は、行詰りをはっきりと残しており、一九〇〇年までは礼拝堂があり、いまでも古い時計塔がある（ t_a , t_b ）。その後屋敷はしだいに西方に拡がり、半マイエル農民以下の小屋住い百姓や Brinksitzer や Anbauer にいたる居住地区が形成されたのであろう。

ここでエヴァースは、こうした袋小路村を、「耕作と牧畜に多忙をきわめ、と

くに牧畜にさいしては共同放牧に従事しなければならぬ農民にとって、まさに理想的な形態」であると考え、クレンツリン説と同じく共同体的規制をとまなう三圃農業の成立と結びつけている。この村落の袋小路が広場と同様の機能を持ち、農民たちの集会と家畜の保護に便利な点に着眼したものであるのは、いうまでもない。さらにかねは、この地方における三圃農業の成立をつぎの理由から五世紀前後とみ、この時期に散村や小村の屋敷が袋小路を中心に凝集し、袋小路村が成立したとみる。したがって袋小路村は、すでに明確な設計上のモチーフをもつ村落であり、実は「規則化した袋小路村」*geordnete Sackgassendorf*であったわけである。しかし後述する理由から、エヴァースの復原した袋小路村は、正確には袋小路村ないし円村の「原初形態」とみなければならぬ。

なおかれは、この地方の考古学的発掘の結果、紀元四〇〇—五〇〇年に屋敷の破壊された跡があり、それらの屋敷跡に発見されるブッヘル式土器 *Büchel Keramik* もその後影をひそめることから、この時期に袋小路村の成立を想定したのであるが、その推定時期は根拠に乏しい。

つづいて五三年には、エンゲル *E. Engel* がメクレンブルクやポムメルン地方の事例について、円村と袋小路村との間には本質的なちがはなく、両者のちがいはたんに広場の形態が円形か袋小路状かのちがいにすぎないとして、ともに袋村 *Sackdorf* として一括するに至った^③。いずれも一二世紀の初期植民時代に、屋敷を一方にしか入口のない計画的な広場のまわりに配置することによって成立したと解釈されたが、この袋村こそ、形態上では、さきにマスベルクやエヴァースが塊村の前身に認めた袋小路村と対応するものである。

このような諸研究によって、ようやく円村と袋小路村はスラヴ族居住地方の「特殊な産物」としてのイメージからはっきりと袂別することになった。いまや袋村は「袋状の内部空間」をもつ広場村の一種にすぎないものとして、既成概念の枠から自由な研究の舞台にときはなたれることになったのである。こうした新しい動きに決定打をはなったのが、ショット *C. Schott* のシュレスヴィヒ—ホルシュタインにおける広場村の研究であった^④。

西ホルシュタインには、路村 *Wegendorf* とならんで、古

い起源を示す -bützel 地名をもつ円形のアンゲルドルフがある。もちろんそれは袋村とはいえないが、広場をもつ村落の集団的分布がドイツ国内においてすらオスト・エルベの開拓地に限られないこと、かつ以下のようにその広場の機能に袋村の内部空間と一致するものがあることが示唆的である。すなわちその広場には、円形のほかに方形や楕円形、多角形のものもあり、夜には門をこざし、最近まで夜間放牧に利用された。シュレスヴィヒでは、この広場村を Fortadorf とよむ。forta は広場のこと。この村落プランは、すでに一二〇四年のニュートランド法典 jutisk lov に記載されている。

村落は低湿地の凹地のまわりに立地し、もっとも低いところには人工的に堰をつくって、家畜の水飲場利用される。一般にニュートランドの広場村は東ドイツの円形広場村より規則正しく、直角状の輪郭をしているが、シュレスヴィヒでは地形に制約され、かつ広場がいく度も拡大してニュートラーセンドルフに近いものもあって、やや不規則である。デーデン村落の規則正しさが、一三世紀の「太陽分割制」sołskite による村落と農地の大編成に由来するとい

う説 (Lauridsen) もあるが、この地方に「太陽分割制」が導入されたという文献はない。家畜の共同放牧に適したこの広場村のプランの起源は、一〇〇〇年—一三〇〇年の「太陽分割制」があらわれた時代よりも、むしろずっと古くにさかのぼると考えられる。

ニュートランド法典は、新規につくられる村落にとっての規範であった。たとえばフエーメルン Fehmarn の Fortadorf のときは、かつてはスラヴ族起源とされた村落であるが、はつきり法典に則したプランをもち、四二ヵ村中四〇ヵ村に方形広場がある。しかし広場のまわりに下層農の家屋が建ち並んで広場が小路状にちぢまり、塊村化したものもあるが、このばあいにも、地名の forta や ford から以前には広場のあったことが推定される。

以上がシュット説の概要であるが、Fortadorf の成立時期の推定にあたっては、イギリスにおけるグリーンヴィレッジ green village の成立を古代に比定したソープ H. Thorpe 説の影響がみとめられる。このことについては後で別の視角から再検討しなければならないが、エヴァースの袋小路はともかくとして、ソープやシュットのように大規模な広

場状の内部空間の起源を一二世紀よりもはるかに古い時代に想定する見解は、はなはだ根拠に乏しいといわなければならない。

すでに戦前フォルカースが先駆的に指摘したところであるが、いまやイギリスや北欧における大小の広場村研究成果を無視しては、円村や袋小路村を含めて広場の内部空間をもつ村落の意義づけがほとんど不可能な状況がこくなってきた。

円村の原初形態

しかし研究の重心は、一きよに新しい方向にゆれうごくものではない。また上述の点からして、エルベ川流域の円村や袋小路村研究には、その原初形態をはじめとして、なおフィールドに即して解明すべきことが残されていた。

五七年には、オーバーベック G. Oberbeck とポーレント H. Pohlendt のアッラー川流域の村落研究があらわれた。

オーバーベックは、新来の小屋住い百姓などを除いて、古い農民層だけによる村落の原核を復原して、小村↓塊村のほかに、袋小路村↓円村などの形態変化のあった事例を明らかにしている^⑤。しかしかれの円村概念は古い農家が円状に

広場をとりかこむ村落すべてを含み、一九世紀の地籍図上で入口が両側にあるものをも円村とするが、円村という以上、本来、行詰りの内部空間がなければならない。ところが、原初的には交通路から隔絶したところに多かった円村にも、成立以後の交通条件その他の変化で行詰りに小路が設けられた事例は、すでに前述のエヴァースなどによって指摘されている。したがって、さらにこうした事例を意識的に積み重ねることによって、「袋」小路↓「広場」小路 Platzgasse の形態変化も解明できるのではあるまいか。

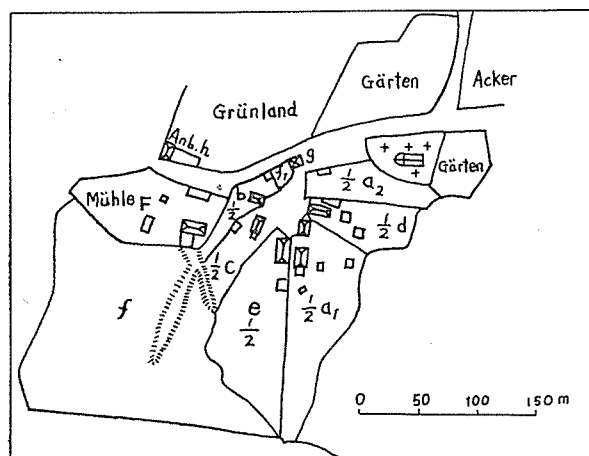
以上の研究成果を総括して、ハンノーヴィシェ・ヴェントラントのゲースト地方における洪積層上の円村に焦点をしばったのが、シュールツルヒョウ W. Schulz-Luchow の研究であった^⑥。かれは形態発生学の手法を駆使して、円村の原型とその形態変化を追求した。

この地方の大部分は、旧アムトリッヒョウ Amt Luchow に属す。六五の村落の中、四五が円村、一二が袋小路村、五がアンゲルドルフ、二が二重列村、一が小村。その他に「囲いこみ」によって成立した散村がある。村落は湿潤カシーブナ林やカシーニレ林などの残片にとりかこまれ、が

いして牧地のしめる割合が多い。

この地方の円村の特徴としては、(一)完全フーフ＝数三八、最大一二、それに一、二の水含み百姓の住居が付属し、(二)広場の直径は五〇―七五メートル、(三)民家は低ドイツ風の単一家屋 *Einheitshaus*、(四)教会は村の外縁部に立地すること、があげられる。一般にこの地方には西隣の低ドイツ地方からの植民が多く、かつハインリッヒ・デア・レーヴ *Heinrich der Löwe* やその後継者の支配領域との関係が強い。つぎの事例研究が示すように、ドイツの封建制度やフーフ＝制度の導入にさいして、やや曲った列状小村や散村とともに、小広場をかこむ三軒屋敷 *Dreihofrunde* が成立することになったと推定されるが、これこそ円村の原初形態で、北西ドイツに多いドゥルッペル *Drubbel* の「規則化した形態」 *geordnete Form* とみることができ。ツェーツェ *Zeetze* 村の例。クレンツェ *Krenz* 北東にあり、一八二二年の地籍図上では「純粋な円村」。古文獻の分析によると、一九世紀の六戸の半フーフ＝農家は、旧完全農家 $a_1 - e_1$ 、 $b - c_1$ 、 $a_2 - d$ の三戸のフーフ＝から一五〇〇年以後分割して成立したもの。すなわち一五六三―一六四四年記

載のフーフ＝農民の名前も三組あり、一五四八年の記述を考慮して、それよりあまり遠くない時期に半フーフ＝農家の成立があったと推定される。f は、すでに一三六〇年と一四五〇年に所見する。耕地所有はないが、貢租がハッケンフーフ *Hackenhufo* の高で課せられていることからす

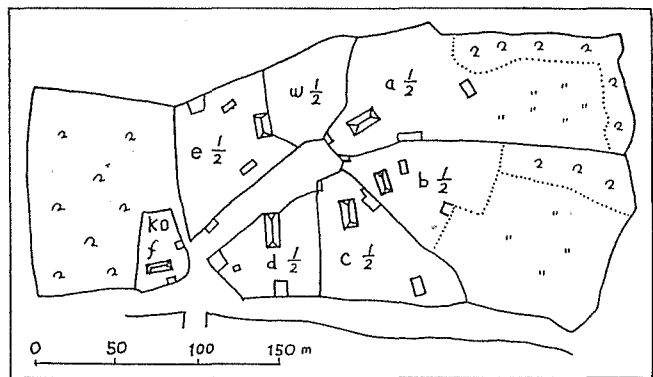


第二図 ツェーツェ村 (1822年)

ると、 f_1 と g の両小屋住み百姓への分化は、一四五〇年と一五五〇年の間に比定される。一七世紀には、その一つは製粉所に、他は学校に変わった。一九世紀には a_1 と a_2 が一つになったこともある。

村域には、地形に適合して二群に道路でわけられた紐状耕地(長さ約二五〇―四〇〇メートル)のあつまりがあった。半フーフ＝農民 e と a はシュルツ＝Schulzeの土地をわけあっているが、しかし一八〇〇年には a だけがシュルツエと呼ばれるにすぎない。完全フーフエは約五〇モルゲンであったが、完全な平等配分ではなく、 a ― e は両側の家より所有高が多く、採草地のときはハモルゲンも大きかった。

村落の原初形態を復原するために従来の小屋住い百姓の家をのぞくと、もとの広場は一九世紀のように封鎖的ではなく、全体として小さく、あまり円くもなかったことがわかる。屋敷分割のさい、半フーフ＝農民たちは、おそらくその母家を少し後退させたであろうし、その単一家屋の前面にある屋敷地をつとめてとりのぞこうとしたにちがいない。 b と e の前面にとびでた敷地の尖端は、最初の屋敷界



第三図 シュランツェ村 (1831年)

runde であったことが明らかである。

シュランツェ＝Schlanze村の例。一八三一年の地籍図では、細長い広場をもつ六戸からなる「不純な円村」。屋敷の最初の分割は、すでに一三五〇年ころまでには行われ、

を推定する鍵となる。さらに分割がすすむにつれて、離れていた付属建物も徐々に両側に接近するようになったと考えられる。以上の形態分析からして、この村落は原初的には小広場にそって完全フーフ＝農家三戸からなる小村Dreihof-

当時の文献に所見する六戸には、その後一六世紀を通じて増減がない。一七世紀には古い半フーフ農家wが荒廃し、その耕地はaとbにわけられ、 $a \cdot b$ は半フーフ農から四分の三フーフ農に上昇している。

イゼンハーゲン Isenhagen 修道院文書によると、一三三八年、tres curias in villa slonze とある。屋敷に近い若干の紐状小ブロックの地片をのぞくと、平行状紐状地が道と溝の間に完全農民ごとに総面積九〇モルゲンの大きさでちらばっていた。その後の耕地分割には、六戸の間に規則正しい変化があり、しばしば最古の三フーフ間に對をなす半フーフ農民ごとに同割合での変化すらみられる ($a-b=1, c-d=2, e-n=3$)。こうした耕地配分は、屋敷付近の一ばん早く開拓されたと推定される部分に多い。こうした事情から、すでに比較的古い時代に屋敷と農地配分が規則正しく行われたことをくみとるべきであろう。

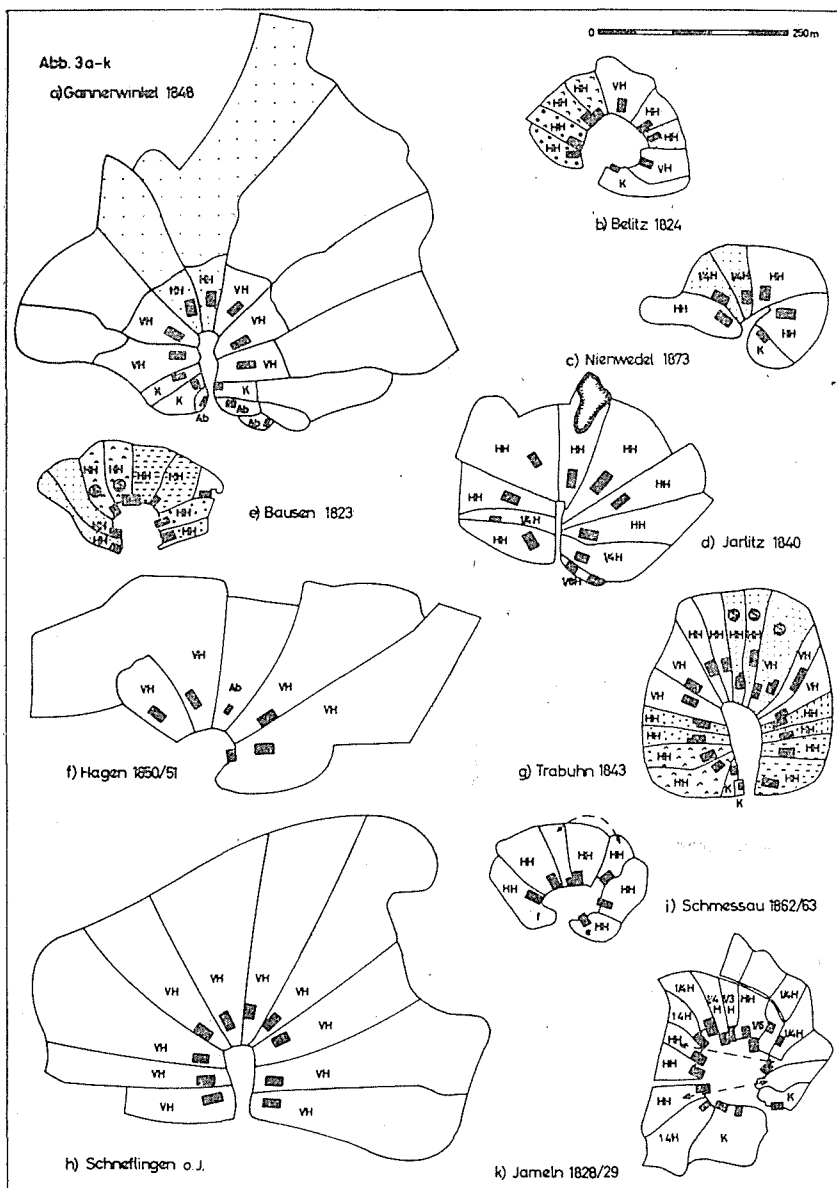
同じような事例研究をつみかさねて、かれはこの地方の円村の原型として上記の小村落を推定したのであるが、さらに全村落形態の成立時期について、つぎの三つをあげている。(一)ドイツ植民開始(一〇〇〇年)以前。小村や散村、な

いし二軒屋敷。(二)初期植民時代(一〇〇〇—一三〇〇年)。小広場のある三軒屋敷や半円状、ないし弓状の小村。なおこの時期の最初には三軒屋敷だけで、二半期になると二重列村も成立したが、しかし植民以前からの村落形態もなお部分的には存続した。(三)後期植民時代(一三〇〇—一五〇〇年)。初期形態が屋敷分割によって、交通路から離れたところでは円村、交通路にめぐまれたところではアングルドルフへの変化があった。一方、袋小路村の形成があり、最後にモデルプランとしての規則正しい円村の完成をみた。

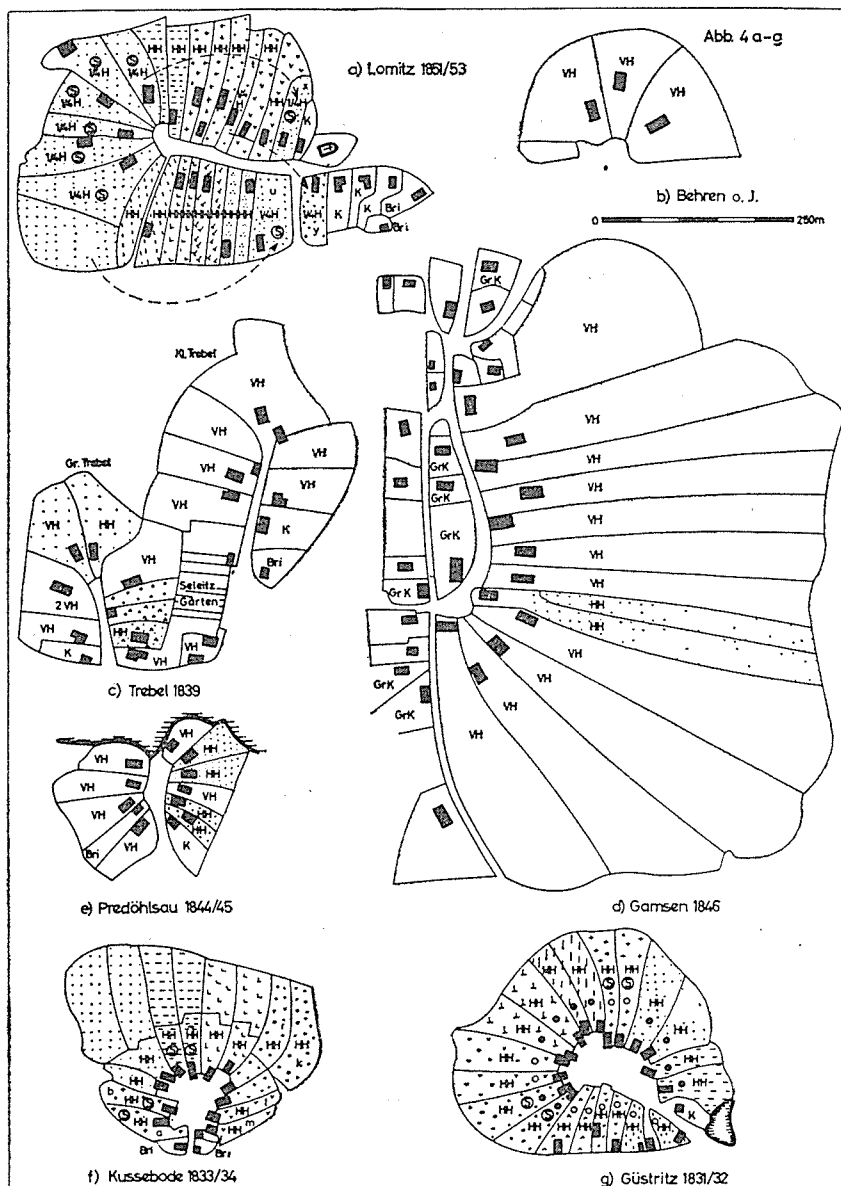
シュルツールヒオウの研究は、形態の変化過程の把握においてきわめて実証的であり、六四年に公刊されたつぎのマイベイア W. Meibeyer の研究とともに、円村研究^⑦に一つの画期をなすものである。

マイベイアの研究

マイベイアのフィールドはアッラー川流域で、北はエルベ川、南はレス地帯の北端に接し、東にはハンノーヴィン・ヴェントラントが続く。氷河地形に刻まれたこの地方は、一八二八年以来、リューネブルクとヴォルフエンブッテル(後にはブラウンシュヴァイヒ公領)侯領にぞくした。



第四図 ヴェントラントにおける円村 (1)



第五図 ヴェントラントにおける円村 (2)

一九世紀の地籍図上にみられる円村の広場が、模式的に考えられるほど円形ではなく、多様な形態をとるばあいの多いことから、きわめて包括的に円村を(A)―(H・I)に分類している。

(A) 各農家は、短かい内部空間のまわりに馬蹄型状をなす屋敷広場にあり、クレンツリンのいう袋小路村(3c, 3d)。(B) 農家が、外方に幅広くひらかれた広場のまわりに馬蹄型状に並んでいるもの(3e, 3f)。(C) 農家は、入口の狭い長い広場のまわりに馬蹄型状に並んで、クレンツリンの「不純な円村」(3g, 3h)。(D) 広場状のとぎされた内部空間のまわりに農家が配置され、クレンツリンの「純粋な円村」(3i, 3k)。(E) (A)と似ているが、長い狭い小路状の内部空間をもち、クレンツリンの袋小路村(4a)。(F) 農家の配列が半円をなさず、鈍角ないし鋭角をなし、内部空間の形成をみない。クレンツリンの半円村(4b)。(G) 二つの円村が合体したもので、一村をなし、外観上にも統一性がある(4c)。(H・I) 円村に似た特長はもつが、不十分なもの(4d)。(4e) 以上の形態分類中には、「円村の偶然的な形態変化」として袋小路村も含まれているが、既述した諸事情からして当然のことと思われる。いまや円村広場の円形は、幾何

学的に厳密な円ではなく、不定形そのものであることが明らかである。

かれは、各形態とその立地条件との間には間接的な関係しかないことを述べ、ついで各形態の変化をたどるためにシュルツールヒォウと類似した操作をこころみ、もっとも古い屋敷の配置から村落の原型ないし核心を推定している。村落は、最古の農家の変遷や新しい居住層によって、発展と変化をみたわけである。一一―二世紀以来の文献には、農家は *curia*、*Mansus*、*hof*、*house* として所見する。かれらは紐状にわかれた交錯圖を保有したが、後にはその分割によって半、三分の一、四分の一フーフ＝農民が成立し、ライエロイテ *Reihelente* 共同体として村の中核となった。リュエネブルク領記録集 *Lüneburger Lehnregister* 1330-68 には、一三三〇年以降フーフ＝農民とならんで小屋住い百姓 *Kotsetere*、*Koten* があらわれる。かれらには古い農民層よりわずかの土地しかなく、農地の周辺に住むことが多かった。一四世紀まではフーフ＝分割は少なかったが、一五―一六世紀になると多くの分割が行われた。これらの分割以後の新居住者は *Kleinkosater* や *Stuckenötter* と呼

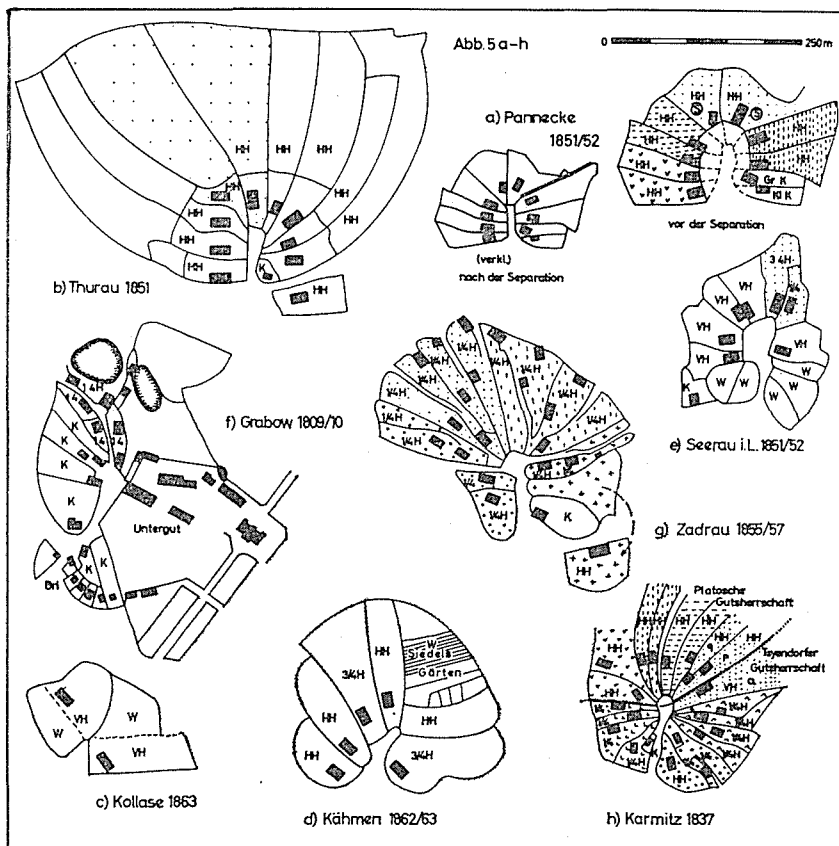
ばれたが、おそらくとも一七世紀にはこれらの移住は終った。それに続く移住者は Brinksitzer や Anbauer とよばれ、わずかの菜園をもつだけで家のない農業日雇いであった。

このような事情から考えると、円村の基本型の形成にあって意味があったのは、前述のライエンロイテであった。ライエンロイテの荒廃屋敷があるばいには、そこに小屋住い百姓が住みつくことはあったが、しかし一般的にはライエンロイテの屋敷の間に小屋住い百姓の家があるのは珍らしい。したがって後来の小屋住いその他の農家を地籍図上から消去すれば、円村の基本型がわかる。もちろん、完全農家が分割過程をふまずに半フーフエ農家に零落したり、貢納賦役の面で半フーフエ農家と同様だったり、また家格が変化したりしたばいには、上述の操作は不可能であるから、フーフエの分割やそれを乱す要因については、荒廃した村落の事例とともに、慎重な考慮が必要であろう。なお、最も古い農家の中でも、庄屋格の屋敷ともいうべき Schutze-höfe や Burgmeister-höfe、または Gemeinde は、つねに村落の入口の向いのもっともすぐれた位置にあるばいが多い。かれらこそ、円村の形成とその管理にあたっ

たのであろう。

こうした操作が、個々の村落について詳しくところみられた。たとえば、リッヒオウーダンネンベルク郡のロミッツ Lomitz 村は、一八五一—一五三年の地籍図では⑧型の円村。屋敷分割は後述する理由から一五四六年までに行われたにちがいない。まず二フーフエをもつ広いシュルツェ屋敷は、八つの四分の一フーフエに、その他の完全農家は二つづつの半フーフエに分割された。しかしシュルツェ屋敷は八戸の新しい農家にとっては狭すぎるので、u と x は村落入口のところに離れておかれた。その後半フーフエ屋敷の一つが分割されたさい、もはその場所に残ったが、y の屋敷は村落の外縁に移された。以上の四分の一フーフエ屋敷一〇、半フーフエ屋敷一五、計二五の屋敷が、一五四六年の屋敷数記録集に記載されている。なおこの記録集には小屋住い百姓四と礼拝堂一がみえる。しかし一九世紀の地籍図からすると、小屋住い百姓は上記の屋敷の外側にかたまっていることからみて、フーフエ分割が終った後に、はじめて成立したものと思われる。

なお後述する論旨との関係上、とくにいまとりあげてお



第六図 ヴェントラントにおける円村 (3)

くべきことは、同郡のカルミッツ Karmitz 村などの地籍図上にみえる内部空間の行詰りにある狭い小路である。これは、村落背後の赤楊林におおわれた小川に沿う低湿地を開いてつくられた新しい採草地にゆく近路で、本来、通過交通に利用されるものではなかった。前述のロミッツ村でも、旧シユルツェ屋敷の隣に二次的な小路があるが、これも円村の封鎖性に反するものではない。しかしザドラウ Zadrau 村などでは、屋敷分割が極度に進んで、内部空間に沿えなくなった新しい屋敷が村落の外方にはみだしたために、円村の原型がひどく変化した。さらに、火災や荒廃による形態変化も無視できない。このようなプロセスを

踏んで、袋村からその他の広場村へ、あるいは塊村への変化がある。

このような形態変化を説明するとともに、マイバイアは、屋敷分割と同時に、この地方特有の耕区 Riegenschlag 内部で規則正しい農地分割が行われたプロセスについても、シュルツールヒョウをこえる詳細な分析をこころみている。この点にもかかれの研究の積極的な意義の一つがあるのであるが、村落形態に焦点をしぼる本稿では、農地問題についてはひとまず割愛しなければならない。

- ① Krenzlin, A.: Dorf, Feld und Wirtschaft im Gebiet der großen Täler und Platten östlich der Elbe. Forsch. z. dt. Landeskde., 70, 1952.
- ② Evers, M. W.: Das Hof- und Dorfproblem. Pet. Mitt., 98, 1952.
- ③ Engel, F.: Erläuterungen zur historischen Siedlungsformen-Karte Mecklenburgs und Pommerns. Zschr. f. Ostforsch., 2, 1953.
- ④ Schott, C.: Orts- und Flurformen Schleswig-Holsteins. Schr. d. Geogr. Inst. d. Univ. Kiel, Sonderband 1953.
- ⑤ Oberbeck, G.: mittelalterliche Kulturlandschaft des Gebietes um Gylhorn. Schr. d. wirtschaftswiss. z. Stud. Nieders. e. V., 66, 1957.
- ⑥ Schulz-Luchow, W.: Primäre und sekundäre Rundlingsformen in der Niederen Geest des hannoverschen Wendlandes. Forsch. z. dt. Landeskde., 143, 1963.

- ⑦ Melbeyer, W.: Die Rundlingsdörfer im östlichen Niedersachsen. Braunschweiger Geogr. Studien, 1, 1964.

四、新しい問題提起

——ヨーロッパのスケール——

シュルツールヒョウやマイバイアの実証研究で、この地方の円村や袋小路村のすべてが説明されたわけではない。一二四世紀の時点で、シュルツェ屋敷を中心として数戸の完全農民の屋敷が不定形に近い半円状、ないし馬蹄型状に配列した小村が、いったいどの程度「規則化した」形態といえるのであろうか。またこれらの発展形態としての円村、ないし袋小路村は、はたしてこの地方の中世植民の一部に特有のものであったと断言できるのであろうか。

既述のように「広場」の平面形態や公共施設を度外視するかぎり、広場のある村落の分布がエルベ川流域以東に特有のものではなく、意外にひろい範囲におよぶことが自明な現在、行詰りの広場をもつ袋村の地理的意義を探るさいにも、視野をエルベ川流域以外にひろげなければならない。少なくとも原資料の適確な分析とミクロな現地調査の困難

なわれわれにとっては、この姿勢こそ唯一の、かつもっとも有力な立脚点となるのではあるまいか。

そこでひとまず村落の広場一般に視点をひろげて、あらためて最近の諸成果から問題の鍵を探ってみたい。

green と Anger

イギリスでも中世ミッドランドには、グリーン green とよばれる広場をつける村落 green village が多かった。

別稿で既述したところであるが、イギリスのソープは、デュラム地方の研究から、グリーンヴィレッジの多くが一三世紀以前から存在した文献記事をもち、地名上でも八八%がアングロサクソンのものであること、また初期ローマ道路付近に立地するものが少なくなく、その周囲にはそれを母村とした開拓村 (‘ley’-‘worth’-‘wood’-‘trad 地名の村落) があることなどの事実^②に立脚して、その起原がひじょうに古いと推定している。

しかし私見によると、上述の事実から判明することは、グリーンヴィレッジの立地する場所の占居が早いことだけであって、グリーンをもつ村落形態の成立の古さは証明できない^③。ソープ自身は、その後五一年には、二次的分散の

行われる以前のデンマークにおける広場村についても調査し、幅広い広場や街路状広場のあるこれらの形態が、ミッドランドやスウェーデンの広場村に類似していることを紹介した^④。前述のシェット説は、このソープ説と関係する。

五六年には、北東イングランドを調査したドイツのウーリッヒ H. Uhlir の論考があらわれた^⑤。かれは、ミッドランドのグリーンヴィレッジやユットラントのフォルタドルフは、東ドイツのアンゲルドルフと同じく、いずれも「共同放牧に利用される広場をとりまく村落」であり、この点では基本型を同じくするとみる。さらに、ミッドランドやユットランドに広場村の形態が成立した事情は、中世西ドイツにおける「集村化」‘Verdorfung’の事情と対応する可能性があると主張する。すなわちドイツ集落地理学の荒廃村や地名研究によると、中世西ドイツの各地において、一〇紀以降小村や散村の屋敷が一カ所に集中して集村が成立したかわりに、旧村の場所が荒廃したことが実証されているが、イングランドでも中世荒廃村の事例がベレスフォード M. W. Beresford などによって紹介されていること^⑥からすると、ここでも中世に集村化の行われた可能性が強い

のではあるまいか。このことが正しければ、広場村は、東ドイツの植民プランというにとどまらず、ミッドランドやユットランドでは「集村化」のための計画プランの一つであつたと解しうる。

ウーリッヒのこの見解は、ドイツ集落形態発生学の成果を海外の諸研究とうまくつぎあわすことによって、ドイツにおける広場村の解釈を一步グローバルな地平におしひろげるものであつた。

その後五八年には、スウェーデンのゲランソン S. Gäranson が、スウェーデンの中世法令に則して編成された村落がオストエルベのシュトラセンドルフに類似していることを、エーランド Öland の事例について説明している。^⑥ つづいて五九年には、ナンシーにおいてヨーロッパの村落と農地についてのコロキウムが催された。その席上、エヴァースは不規則な広場をもつ村落の分布が、かつて北西ドイツからデンマーク、スウェーデンなどにひろくみられた点に着目して、独自の形態分析をこころみている。^⑦ 共同放牧と関係深い村落広場に国際的な関心がよせられはじめたのに即応するかのよう、このころから北欧地理学派

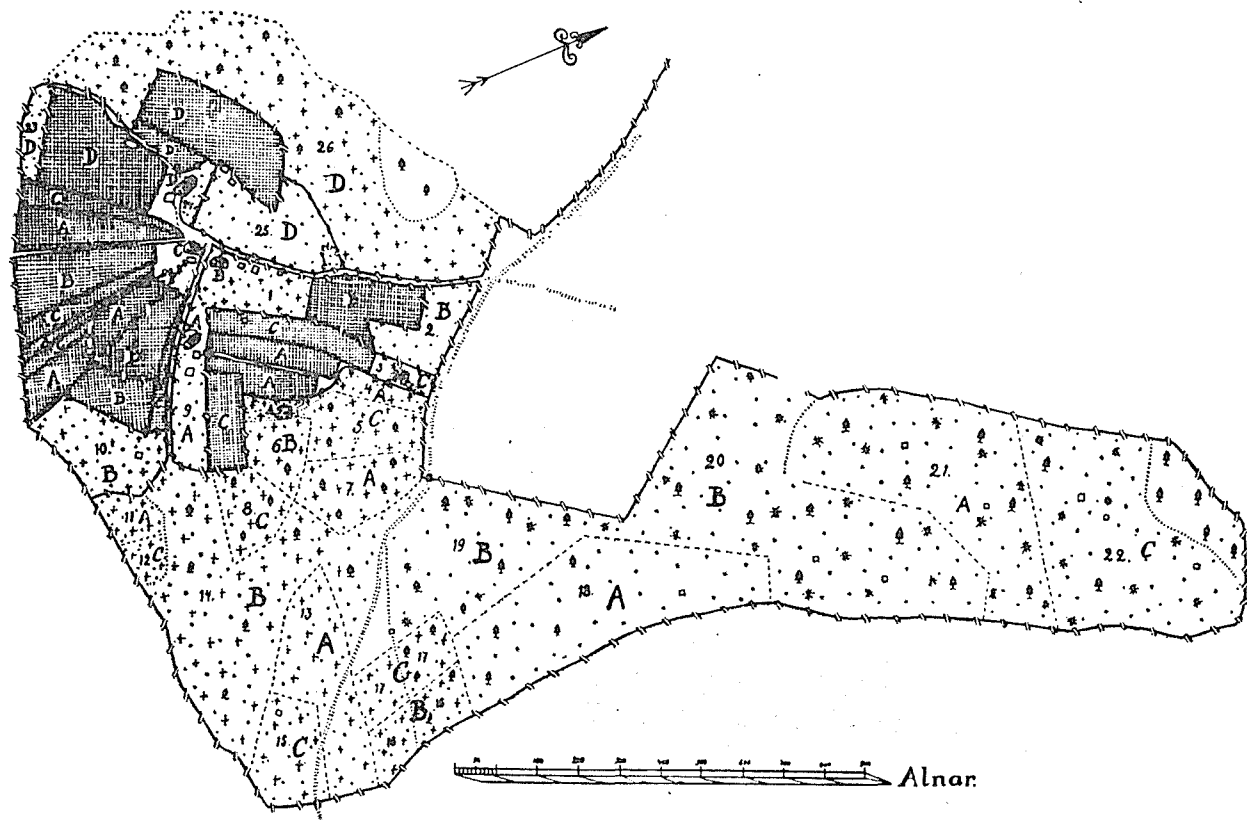
の論考にとくに注目をひくものが増加した。したがって本稿でも、しばらく北欧に舞台を移さなければならない。

Ⅱ 空間

北欧の集落地理学については別の機会にあらためて詳述する予定であるが、当面注目をひくのは六一年の国際地理学会ストックホルム大会における形態発生学部門の諸発表である。なかでもまずと呼ばれる家畜保護のための空間に関して、スウェーデンのエリクソン S. Erikson によって行われた報告は、円村や袋小路村の原初形態に直接関連する内容をもつ。^⑧

一九世紀末まで近代的な耕地整理の行われなかったスウェーデンの西部や南部諸州では、中世にも「太陽分割制」*solskifte* が導入されなかったので、地籍図上の村落や農地は古い時代の形態をよく残していると考えられる。

図上には、柵でかこまれた「家畜の道」が共同放牧地と二、三戸の小村との間を結び、さらにその柵は、小村と内農地 *inngor* をとりまいている。ところで一三世紀のヴェストヨータ *Västgöta* 法令などには、囲いの柵に関する記事があるが、いずれも放牧中の家畜を特定場所にとじこめ、



第七図 イエムトラント、レーデン教区の1村落(1693年の地籍図による) A—Dは農家、梯子状の部分は耕地、ドットの部分は牧草地(乾草)、ドットと十字状記号の部分は牧草耕地、ドットと星状記号の部分は焼いた土地

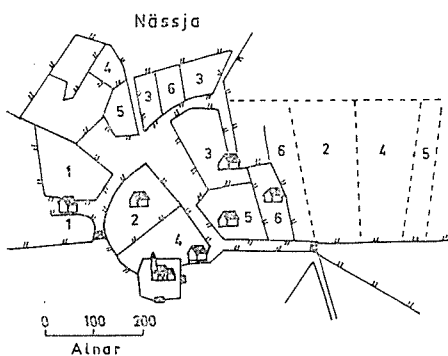
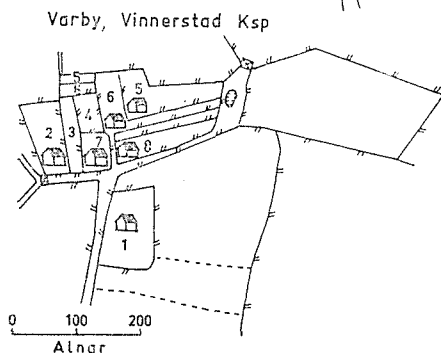
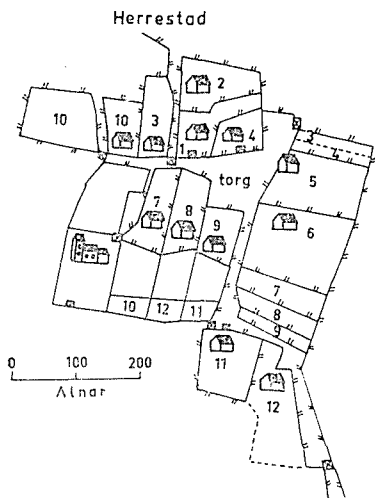
その排泄物を肥料として確保するための規定であった。また、村落の囲いこみがおこなわれ、「門がとざされる時期」と「とざされる時期が終わる時期」についての規定 *Værmalag* もある。内耕地における作物の収穫がすんだとき、あるいは春作物の播種の前には、畑は開放され、たれかれの所有地の区別なく放牧された。

ここで関心をひくのは、ヴェストヨータやスコネ Skåne 地方では、一七世紀の地籍図上の小村が、ヴェントラントで復原された円村の原初形態によく似ていることである。半円状や弓状、あるいは三軒屋敷をかこむ円状の空間が小村の前にあり、そこから「家畜の道」が外方に通じている。ウプランド Uppland では屋敷の傍を、またノルランド Norrland 南部では「家畜の道」を *stuga* と呼ぶ。*stuga* は一般に家畜のいる凹地や谷を意味し、家畜の水飲場であり、また小家畜の保護される場所でもあったし、東スウェーデンでは村落の敷地のまわりの道を意味した。ウプランド法令やダラ Dala 法では村落を *tubundin* というが、これは「道と結びついた」の意。ドイツの円村が牧地にとりまかれた水のえやすい凹地に多かったことからしても、この *stuga*

とその傍の小村こそは、まさに円村の原初形態そのものであるといわなければならない。

このような村落形態は、もちろんスウェーデン地理学界ではすでに戦前から周知のところであった。^⑨しかし前記のマイベイアの論考に列記された文献には、本節にあげた文献はついに皆無であり、国外論文としてはハンネルベリ D. Hannerberg のもの唯一つにすぎない。

それはさておき、六二年にはエスタヨートランド Östergötland 地方の古い農業景観とその発生について、ヘルムフリット S. Helmlid の大作が発表された。^⑩エスタヨートランドは「太陽分割制」の施行されたところで、上述の西・南部諸州の村落とはちがいが大きい。広範囲な内容をもつヘルムフリットの論述の中から、一六五〇—一七五〇年の地籍図上の村落形態に関する説明をとりだしてみると、この地方には、「太陽分割制」によって幾何学的に再編成された輪郭をもつ村落と並んで、この制度に合致しない形態の村落のあったのが注目をひく。「太陽分割制」は、一四世紀ころの東部と中部諸州の法令にみられるが、いまエスタヨートランド法令 Östergötalagen についてみると、



第八図 17世紀のエスタートランド地方における組織化された広場をもつ村落
Herrestad (1695年), Varby (1694年),
Nässja (1688年)

「村の規則的な編成を終えると、おもな境界石を神にかけて北と東、東と南、南と西、西と北において強化すべし。しかしして尺度もて境界を固定せよ」とか、いまや村は列状をなし、しかしして道路は村に沿わん。すべての屋敷を道路に沿わしめよ。かくて道路が村の中央を通るべく、まさに法に「適うべし」とか、「かつては五エレンの測桿を用いて、各アトツング atting ごとに二スタンゲ幅を利用すべしと法令にあり。いまは約定によりて、各アトツングごとによ

り大なる尺度を利用すべく規定されたり。……かくて耕地は屋敷地にならない、採草地は耕地にならない、柵は採草地にならない、さらに森と漁場を片づけよ。すべては屋敷地になって整えよ。屋敷と農地があわざるに至れば、屋敷を耕地か採草地か柵にあわせよ。かくてすべては法令に適わん。すべてが屋敷とちがうときは、屋敷を所有地にならないてつくるべし。これが laga lög なり」とある。

以上のように、村落の基本形態は道路に沿う列状の輪郭

をおり、屋敷幅も道路幅も一定の大きさに梓づけられた。

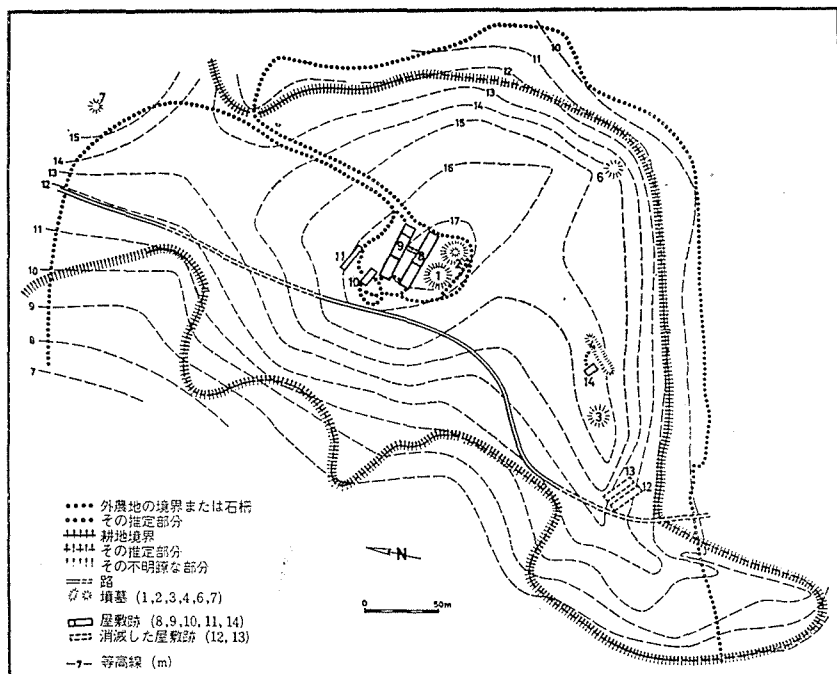
しかし後世の村絵図の調査によると、この幾何学的モデル *Irreg. linge* の実施にあたっては、多様な変形が行われたのも事実らしい。ヘルムフリットはこの点を詳しく追求しているが、当面指摘すべきことは、屋敷にとりかこまれた道路の両端には柵の門があり、道路が広場の機能をもったことである。まさに東ドイツのシュトラセンドルフに近似するではないか。

しかしわれわれにとってより興味深いことは、「太陽分割制」に合致しない村落形態の存在でなければならぬ。このタイプにも、まったく無秩序な散村や小村とならんで、ある種の組織化が加わったものがある。しかも後者の中には、不規則な広場 *torg* のまわりに一〇戸以下のやや不整形な屋敷のならんだ形態が含まれる。その広場には、ときに泉がわき、柵で耕地から仕切られた「家畜の道」が共有地に通じる。教会の立地は多く屋敷のはずれで、広場のばあいはいくつかある。これらは「太陽分割制」に合致しない村落とはいっても、この法令の公布されたエスタヨートランドの事例であるから、各所に作爲のあとがあり、中世スウェー

ーデンの村落にしては屋敷数も多く、中には屋敷幅だけ法令の適用をうけたと推定される例もある。したがってこれらの村落は、基本的には上述のエリクソンの *Irreg. linge* のある袋村の原初形態が北欧なりに発展した形態と考えるべきであり、それだけに内部空間の完全な行詰りは失われた事例が多い。既述の「袋」小路から「広場」小路への推移が、ここにもみられるのではあるまいか。

このようにたどつてみると、円村や袋小路村は、その原初形態も発展形態も、もはやはっきりと中世以来のエルベ川流域の植民地方にだけみられる「特殊な産物」とはいえなくなる。六一年、ウーリッヒが発表したブリタニーの *Brocéliande* 地方における一八二七年の地籍図上にも、小村の傍に不定形な袋状広場が識別できるように思われる。^①

さらに六四年には、西南ノルウェーについてレネセツト *O. Rønneseth* の研究がでた。^② 海岸から一、五キロメートル離れた低モレーン丘上のニエールハイム *Nietherheim* 北方の中部イェレン *Jæren* における荒廃村とその農地の研究であるが、ここには上述の小村に酷似する村落遺跡がある。たとえば七世紀以後に荒廃したと推定される村落 *Em*



第九図 ノルウェー、北ニュールハイムの村落遺跡

の一つは四戸の小村。南には二個の墓があり、祭儀の場であつたらしい。微高地にある屋敷全体が、柵でかこまれ、袋状の空間をなし、入口は石垣で縁どられた道に開いて、放牧のための外農地 U'gard に通じる。もともと外農地の内側には内農地 innmark があり、農耕に利用されたが、図上では耕地境界が外農地の外にまでのびているのは、耕地の拡大が生じたためである。

レネセットの研究によると、こうした形態は歴史時代を通じて各地に存在するが、小村状の村落 mangbølte tun そのものは、原初的な孤立荘宅 einbølte tun における内農地の分割 odelskifte による戸数増加の結果であるという。しかし五戸以上の村落は珍らしい。

いまや円村や袋小路村の原初形態と目されるものが、ヨーロッパの古い農牧混合地帯においては、かつてかなりひろく分布していた可能性が濃くなってきた。北西ドイツのドルッペルや南ドイツの古い垣内村 Etterdorf などについても、当然ここで再検

討すべき段階にたちいたったのであろうが、本稿の主題からして村落の原初形態だけに論点をかぎることはできない。

形態のモチーフ

村人たちの祭や寄合いのため以外にも、共同放牧の家畜を夜間保護するための小空間は、たしかにヨーロッパ村落の傍に不可欠のものであろう。しかしこの小空間は、屋敷の分割や増加だけによってひとりでに形を整え、円村や小路状の封鎖空間に成長する必然性をもつものではあるまい。アルプス以北にかぎってみても、中世以来のヨーロッパには、円村や袋小路村以外にも散村・小村・列村・路村や不規則な塊村をはじめ林隙村・湿地村・アンゲルドルフ・シュトラールセンドルフなどの村落形態が多彩に発展した。これらの形態の中の一つが特定の場所とくに発展するためには、その村落モデルが集団や領主によって場所への適合性やその他さまざまな立地条件を考慮して採択され、そのモデルの実現にむかう社会的強制がなければならぬ。

上述のように北欧では、法令によって屋敷の配置が画一的に強制された地方に規則的な街路状広場をもつ村落が多く形成されたし、またヴェスタミートランドなどにおける

円村の原初形態に似た村落にも、すでになにがしか中世の法的規制のあとが認められる。ところがエルベ川流域への中世ドイツ植民にさいして、円村や袋小路村の創設を明文化した条文はほとんど確認できない。しかしこの地方でも、これらの創設についてのある種の規定、ないしその村落形態のモチーフだけは、少なくともあったと予想すべきではあるまいか。

このことは、ややちがったニュアンスではあるが、シュールツールヒェウやメイバイアともに述べているところである。しかし文献による実証は目下のところ不可能に近い。この隘路をどのようにしてこえることができるのであろうか。

- ① Thorpe, H.: The Green Villages of County Durham. Transactions and Papers, I. B. G., 15, 1949.
- ② 拙稿「中世ヨーロッパにおける村落と耕地について」(『京都大学文学部紀要』一〇号)。
- ③ Thorpe, H.: The Influence of Enclosure on The Form and Pattern of rural Settlement in Denmark. Transactions and Papers, I. B. G., 17, 1951.
- ④ Uhlig, H.: Nordostengland. Kölner Geogr. Arbeiten, 9/10, 1956.
- ⑤ Beresford, M. W.: The lost Villages of England. London 1956.

⑥ Gåranson, S.: Field and Villages on the Island of Öland; A Study of the genetic Compound of an East Swedish rural Landscape. Geogr. Annaler 1958.

⑦ Evers, M. W.: Agrarlandschaft und bäuerliche Siedlung. Géographie et Histoire Agraires, Annales de l'Est. 21, 1959.

⑧ Erikson, S.: Swedish Villages without systematic Regulation. Geogr. Annaler 1961.

⑨ スウェーデンの集落と農地の形態発生学的研究については、前出拙稿でも一部触れるところがあったが、あらためて別の機会に詳述したい。

⑩ Heimfrid, S.: Östergötland „Västansjö“; Studien über die ältere Agrarlandschaft und ihre Genese. Meddelanden Från Geografisk Institutionen vid Stockholms Universitet, 140, 1962.

⑪ Uhlig, H.: Old Hamlets with Infield and Outfield System in Western and Central Europe. Geogr. Annaler, 1961.

⑫ Rönneseth, O.: Siedlungs- u. Wirtschaftsformen im südwestlichen Norwegen in ihrem Übergang von der vorhistorischen zur historischen Zeit. Die Erde 95, 1964.

五、集落のモデルと都市・農村関係

いま一〇—一六世紀のドイツ全土について集落の平面形態を大観してみると、都市と村落プランの間にはつぎのような大まかな対応関係のあることがわかる。前述の隘路をこえるヒントが、ここにあるとはいえないだろうか。

都市と村落形態の対応

まず中・南ドイツでは、かなり多くの都市がローマ起源である^①。さらに領主によって市場町として創建された中世都市の目立つこの地方には、同時に農村地帯にも不規則な塊村とともに、領主創建の広場状内部空間をもつ村落が散見する。しかし創建された集落といっても、直線化と規則性の点では十分でない^②。一方北西ドイツでは、この種の市場町起源の都市とともに、古い村落やブルク Burg から「徐々に成長した」と推定される不定形な輪郭をもつ小都市が多いのに対して、東ドイツの中世内陸植民地方では、幾何学的な広場と直線状街路と環城壁をもつ純粋な創建都市がたまたまて分布する。またこの東ドイツには、規則的な輪郭をもつアングルドルフやシュトラッセンドルフなどの創建村落が目立つ。ところが、規則性と規模・施設の点でこれらの大村落より劣る円村や袋小路村の多い本稿のフールドは、まさに東ドイツと北西ドイツの漸移地帯にあたる。

中・南ドイツにおいて、一九世紀の土地改革直前の状況を示す地籍図上の多彩な村落形態の形成にとって直接の機

縁となったのが、中世の「集村化現象」であったといわれる。ところがこの現象は、粗放穀草農業にとってかわる三圃農業などの農業集約化と即応するものであった。村落の精神的秩序の深化に大きい役割をはたした村教会や教区の定着も、これとあい前後する出来事であった。中世の森林開拓も、東方植民も、西部の古い農業地帯の充実と無関係ではなかった。

しかしまた同時に、こうした農村の充実も、キリスト教を始めとする物質・精神両文化の村落への滲透も、中世都市の発展に支えられたものであったことに留意しなければならない。村落の生活も、その発展も、大小の管区中心としての都市を起点とし、都市にすむ領主や司教の意向を反映するものであった。このさい、計画的な土地開発に果た修道院の役割を、とくに評価すべきであろう。とすると、村づくりのモデルが同じ管区内の都市のモデルと一部にモチーフを共通するものであったとしても、別に不思議はないのではあるまいか。とりわけ広場の設備は、たんに農作業や家畜の夜間放牧のためだけでなく、村落のまとまりと合理化のためにも、都市生活に劣らず必要なものであった。

中世の都市と村落の形態上の連続性については、すでに早くマンフォード L. Mumford が指摘している。「中世都市の区画配置は村落と同じ雛型に従ったものであった。街道村があれば街道町があり、一方に四辻村があれば、こちらには十字路町があり、円形の村と円形の町があった。そして最後には、不整形に添加されていった村落と、外見的には全く同じように無方向で偶然的な型の町があった。」しかし事実は、このすぐれた建築文明評論家の直截な叙述ほどすっきりしたものではない。

これらの点を明らかにするにあたって、本地域にはとくべつ有利な条件が揃っている。本地域の含まれるニーダーザクセン地方では、都市人口の四分の一が農業に従事しており、とくに五〇〇〇人以下の市場町や地方町が多い。④シュヴァルツ G. Schwarz の所謂「徐々に成長した」都市 *allmählich gewordene städte* は、一般に一二世紀二期以来都市権をえているのに対して、計画的創建になる都市は、一二世紀の最初の半期、ないしハインリッヒ・デア・レーヴェ時代にまで溯りうる。前者はがいて西部に多く、後者は本地域にやや多い。

しかしニーダーザクセンのほぼ三分の二の市場町は、「徐々に成長した」都市とみてよい。したがってこの地方の小都市では、中・南ドイツに比べて村落との区別が漸移的であり、村落らしい特徴をいたるところに留めている。シュヴァルトの研究によると、不規則ないし村落的形態の町が平地で二二、山地で四〇を数え、いずれも煉瓦造りの教会とニーダーザクセン風の民家と同じ切妻木骨家屋が多く、素朴で無趣味な印象が濃い。中・南ドイツでは小都市の住民まで都市的意識が強いのに対して、ここではそれが乏しく、がいて市民と農民との差が少ない。

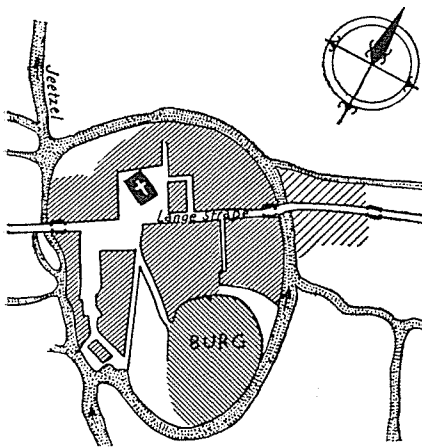
それにもかかわらず、地域形成の起因力としての都市の力は無視できない。この地方の植民にイニシャチヴをとったグラーフはブルクに居住したし、木骨家屋もブラウンシュヴァイヒなどでこの地方独特のローカルなタイプを完成し、それが周辺にも伝播している。

したがって、これらの「徐々に成長した」都市の内部空間の形成と、その周辺の円村や袋小路村の形成との間には、平面形態の上でも密接な連続性があったと予想される。このことを念頭において、ケイザー D. Keyser の論著に付

せられた「都市平面形態図」をもとにつぎのような形態発生学的考察をこころみてみたい。

都市広場の原初形態

この地方の植民を掌握したグラーフダンネンベルクの居地ダンネンベルク Dannenbergh から始めよう。この町は、エルベ川支流イエーテル河畔のゲーストと湿地の境目にあり、河流にかこまれた円形のプランをしめし、水面からわずかに数メートル、しばしば洪水に襲われた。最古の施設はブルク。グラーフが初見するのは一一五八年。グラーフ



第十図 ダンネンベルクの都市プラン

シャフトとブルクは、一三〇三年にはブラウンシュヴァイヒ・リューネブルク大公に移ったが、両家の成員はずっとここに居住した。一六〇八年、一三〇戸。

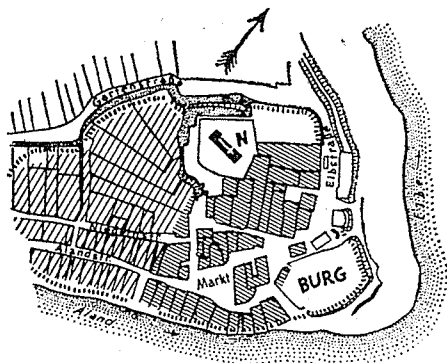
ブルクは盛土した丘にあり、濠をめぐらす。その一部は一八七九年に埋立て、牛市がおこった。旧市域の核心には、ランゲ Lange 通りの西寄り南側に細長い、屈曲部のある(E)型に近い、不完全な袋小路状の空間が河岸でたち切られている。この広場の原型は、少なくともグラーフが文献に所見する一二世紀前半には成立していたにちがいない。一二九三年には、すでにこの町は管下の植民の進展を反映するかのように cives von Dannenberg と称し、一三五六年には年市が初見する。教会は、広場とは本通りをはさんで向い側の方形広場に立地するが、この方形広場の形成は、上記の(E)型広場よりは新しく、一三世紀末である。

イエーテル川の分流にかこまれた砂質の微高地に、ヒッツアッカー Hitzaker が立地する^⑦。この町は、地名からすると原初的には村落。都市の西部、高さ八〇メートルの丘上にあるヴェルフィッシュ家領のブルクは、一二世紀末の創建になり、一三三五年にはマルシュトフ Marschor 通

りとブラウンホーフ Brauhof 通りとの間には、hus in der Stat とある。それより早く一二〇三年には urbs と記され、四八年にはエルベ川舟航税が初見し、八九年には参事会ができた。その後、湿地とゲースト地方の村落の農産物の交換が行われ、家畜や小売物市場もおこっている。住民は、漁業・船航・醸造をいとなんだ。

市域がイエーテル対岸に拡張しはじめたのは最近のこととて、現在なお初期プランをとどめていると考えられる。ハウプト Haupt 通りは、はじめ城から北方に向けてつくられたらしい。城の前のハウプト通りとエルブ Elb 通りの合するところにある広場は、ほぼ三角形をなすが、これらの通りの開通と一五四八年の大火によってかならずしも原型をとどめない。しいて分類すれば(B)型に近く、上述の事情からして一二〇三年以前にはその原型が成立していたと考えられるが、その袋状の形態を証明する鍵は、いまでは失われている。事例を移そう。

その東南、エルベ川にアラント川が合流する地点にはシュナケンブルク Schnackenburg がある^⑧。一二一八年にはブルクが初見する。エルベ川舟航税もとりたてられ、近く



第十一図 シュナケンブルクの都市プラン

む古い集落があり、広場からは三つの通りがでる。広場のはずれの部分的には濠にかこまれたザンクトニコラウス教会がある。一三世紀末の創建になり、一二八四年には司祭が認められる。

本図は一七二八年の大火前のもの。すでに一六二四、七四兩年にも大火があったが、初期のプランをなおとどめていると考えられる。アラント通りに沿う市域の拡張は一四世紀以降のことであるが、一七七四年約九三戸というから、

では対岸への渡しが行われた。舟航税は一四世紀末以来、マルクグラーフブランデンブルクからブラウンシュヴァイヒ・リュネブルク大公に移った。ブルクの前方には、不整形な市場広場をかこ

一四世紀以前のこの町は、まさに村落なみであったとみなければならない。一二世紀第二半期に成立したと推定される市場広場は、北西にのびて袋状の④型空間をなし、その端が教会である。ここでも市場には牛群が集められた。エルブ通りにも、袋状の小空間がある。

ルーエ川右岸のヴィンセン Winsen は、一一五八年 Winhusen の名で初見する。三キロメートルでエルベ川に至る交通の要地で、一三九二年には船員集会所が建てられた。

市街の変遷をくわしく追跡できる資料は少ないが、一一五八年にはヴィンセンの十分の一税がみえているから、当時なお農業的要素を残していたのは明らかであろう。旧市は、南はリュネブルク門、北西はハンブルガー門、北はノルデ門の間にひろがり、北よりに幅広い計画的なマルクト Markt 通りが東西に走る。マルクト通りの西端に狭い堀跡があることからすると、かつては前記の旧市域が堀でかこまれていたらしい。この計画的な市域の成立時期は不明であるが、すでに一三世紀には教区権、一四世紀には都市権が知られている。一五八五年、城内に約二〇〇戸があ



第十二図 ヴィンセンの都市プラン
R 市庁舎, G 時計塔

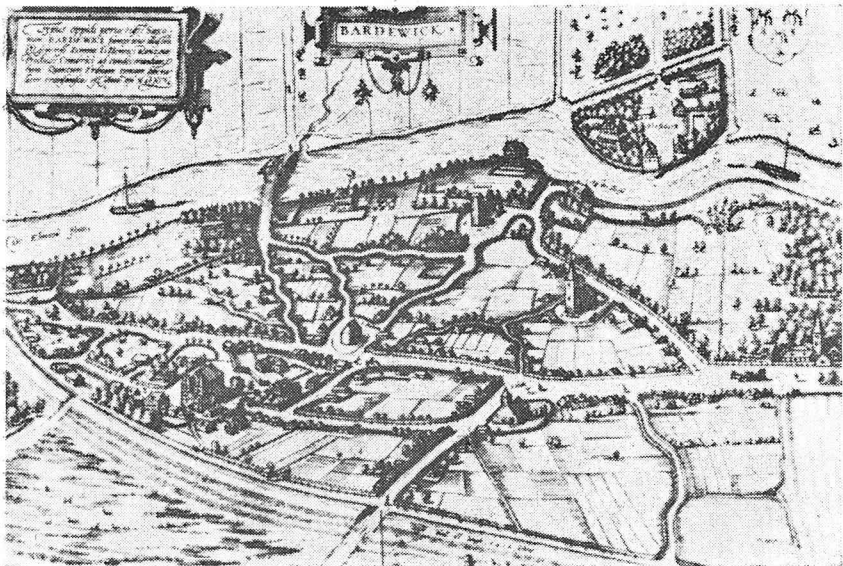
り、大火で一四八戸が焼失したという。

ところで計画的な街区成立以前のこの町の原初形態を、間接的なから推測する鍵が二つある。一つは、旧市域のマルクト通りの北部から新しい市域を画した環城壁の南部にかけて、ルンデ Runde 通りとハゼルホルスト Haselhorst 通りを挟んで、(G)―(R)型の内部空間に近い平面形態がみられること。完全な行詰りはみられないが、ルンデの地名とその通りの形態からして、ルーエ川低地の袋状広場プランをおもわせるものがある。旧市域の地割を不規則に斜断するシュミーズ Schmiede 通りも、後来的のものであろう。また西部のダイヒ Deich 通りの南側には、旧

ルーエ分流左岸に完全な袋状の空間がみられるが、この街区も、少なくともハンブルガー門成立（一六二七年）以前には川中島上の袋小路村に近かった可能性が強い。これらの平面形態こそ、一二世紀のヴィンセンを復原する手がかりとなるものではあるまいか。

エルベ川支流イルメナウ河畔のバルドヴィク Wardvik は、最古の通商地の一つで、カール大王の特別保護下に発展した。バルデンガウ Wardengau にあり、七八〇年にはガウ全員が洗礼をうけている。ザクセンとスラヴ族の貿易で栄えたが、一一八九年にはグラフ・デア・レーヴェの攻撃によって、一二世紀の都市形態を整えることなく没落していった。

一五九五年のフレゼ D. Frese の絵画が、ケーザーの著書にみられる^①。いたるところに不規則な広場が残るが、広場も道路もまわりの耕地から柵で区切られ、両側に柵をめぐらした道路が外縁部の放牧地に通じている。まさに広場は夜の放牧場であり、道路は「家畜の道」ではなかったのだろうか。木骨家は、道路に沿って列状に分散している。家屋は広場のまわりにだけ集まっているわけではないし、



第十三図 バルドヴィク（1595年、フレゼ作）

広場も行詰りは残していないから、この絵画風景に円村と共通するものを探すのは、あるいはゆきすぎかもしれない。だがイルメナウ川の川中島にあるフレズドルプ Fredorup だけは、袋状の円い内部空間をもち、円村に似たたえずまゐを保っている。

以上の小都市広場では、完全な行詰りはすでに認められないばかりが多かった。しかし円村や袋小路村においても、既述したように内部空間の行詰り部分に後世に二次的な小路が設けられた事例があり、かつ交通路沿いには袋状の内部空間のないアンゲルドルフへの変化が多くなる傾向のあることについてはシュルツールヒョウも指摘しているところであるから、なおさら都市広場では、通過交通を完全にたち切る行詰りは長期にはゆるされなかったのであろう。

それはともかく、これらの小都市は、中世植民時代にはそれぞれ重要な地域中心としての諸機能を果たしたが、その後の発展にみるべきものがなく、各時代を通じて多少とも農村的要素を保持したものが多く、不規則で、封鎖的な形態をとどめたこれらの都市広場は、防衛と集会や市場・駐車機能のほかに、まわりの村落と同じように農作業や家

畜の保護のための機能をもったと考えられるから、都鄙の内部空間の間には、平面形態上でも、機能上でも、きわだちたがいはいはなかったとみてよい。教会も、広場のはずれにあるばかりが多い。

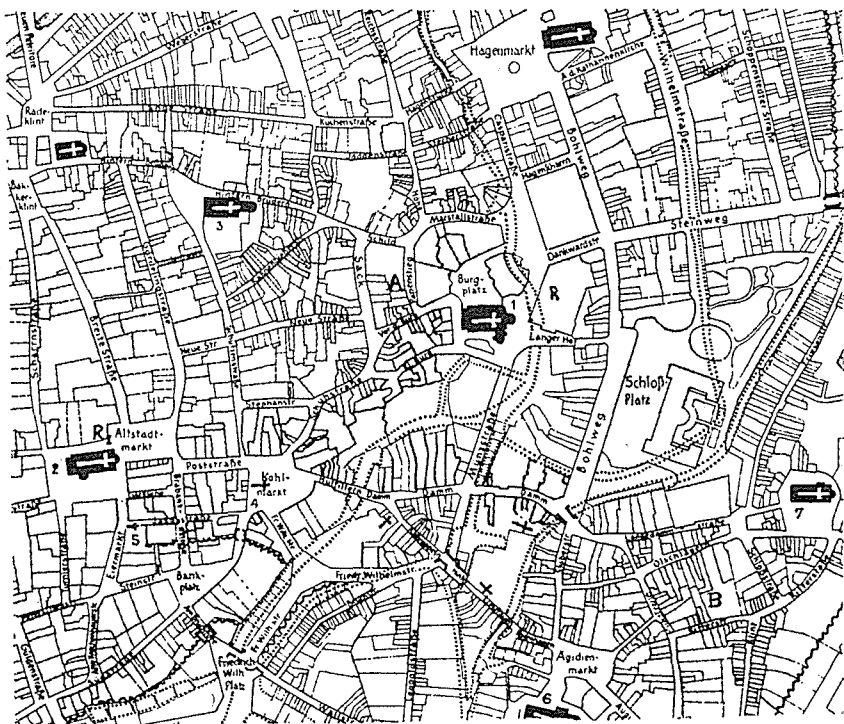
マンフォードは、中世初期の都市に多かった袋路が、冬の風の猛威をやわらげ、ぬかるみを減らした点を指摘しているが、この有機的機能もまた、円村や袋小路村の内部空間にそのままあてはまるものではあるまいか。

半円や弓状の小空間をつけた開拓小村が徐々に円村や袋小路村へと意識的な発展をはじめた一一一四世紀に、村落的功能をあわせもつブルクや市場のある都市では、不定形で、封鎖的な内部空間の形成が、周囲の村落より一足早く完成していった事実注目したい。こうした内部空間の完成こそ、周囲の村づくりに具象的な雛型を提供するものであった。

都市と村落の連続性

こうした都市と村落の連続性について、もう少し複雑な起源をもつ大中諸都市の原核を探ってみよう。

この地方の大中中心は、ブラウンシュヴァイヒ¹²⁾。市域のま



第十四図 ブラウンシュヴァイヒの都市プランの一部
 Aはダルクヴァルデ、Bはブルンスヴィク、1 ドーム、2 マルティ
 ニ教会、3 ザンクトウルリキ教会、4 ザンクトウルリヒ教会、
 5 ザンクトヤコブ教会、6 ザンクトエギディエン教会、7 ザンク
 トマグヌス教会、R₁、旧市庁舎、点線の部分は旧河道

わりを迂迴しているオカー川は、もと
 もとシェンツ Munz 通りからドーム
 の東を北流していた。この河道の兩岸
 は丘陵をなし、ドームの南部で七六メ
 ートル。九世紀にはグラーフブルノン
 Graf Brunon 家のブルノ Bruno とダ
 ンクヴァルト Dankwart 兄弟によって、
 右岸にはブルンスヴィク Brunswick、
 左岸にはダルクヴァルデローデ Dan-
 kwarderode の二集落が設けられたと
 いわれるが、これがこの都市の原核と
 なった。

ダルクヴァルデは、地名の示すよう
 に開拓村。ブルク広場西方のパペンシ
 ュテーク Papenstieg 通りのレス層
 上にあったらしい。その南方には、九
 世紀のヤコブ Jacob 教会があったが、
 これは現在のヤコブ通りにあたる。ヴ
 エント族に対する防禦の必要からつく

られたブルクは、河道の水を導いて濠をめぐらした。環濠は、現在も残っている。一一七五年には、ハインリッヒ・デア・レーヴェによって大公の宮殿が、その南には大聖堂が創建された。

その西部の短い、幅広いザック Sack 通りは、現在も南端に行詰りを残す。前述のダンクヴァルデローデの集落内の地割を踏襲するものかどうかは断定できないが、とにかくこの界限にブルクに所属する町の成立をみたのである。一一八七年にダンクヴァルデローデの十分の一税が見えることからみて、この界限では、当時なお前節の諸事例と同じように、村落と都市との両要素が混在していたといわなければならない。

一方ヤコブ教会のまわりでは、すでに一〇世紀に市場集落の発達がみられた。コールマルクト Kohlmarkt 広場の横には、一〇三八年以前にザンクトウルリヒ St. Ulrich 教会ができたと推定されている。いまでも東側に不定形な輪郭をのこすコールマルクト広場と前述のブルク地方とを結ぶ部分にも、この時期から徐々に市域化が進んだことを暗示するかのよう、無秩序な街区と、狭く折れ曲り、閉

ざされたヴィスタをもつ路地状の街路が目立つ。その北方や西方の一二世紀以降に成立した規則正しい新市街とはちがって、ここでは既存の地割をうけつぐところもあったにちがいない。ザンクトウルリヒ教会の教区が、ほぼこの範囲にかざれるところからみて、この不規則な平面形態こそ、一二世紀以前の町と村に共通する地割を語るものであろう。

右岸のブルンシュヴィクは、旧オカー河畔の olde wiek と古いブルノの村落とエギディエン Aegidien 修道院を原核として発達した。ブルノ村の範囲は、西はクー Kuhn 通り、南東はリッター Ritter 通り、北はランゲンダム Langendam 通りで、北東端にはマグヌス Magnus 教会。ランゲンダム通りとエルシェレーゲルン Oel Schlagen 通りの間には、小広場に Ackerhof があるが、旧領主のものであろうか。その南部は、おそらく「小村落」 das kleine Dorf と呼ばれた。付近のヘッレンホーフ Herrenhof 通りやリッター通りの地名も、古い社会関係を物語っている。

マグヌス教会の創立は一〇三一年。当時一七ヵ村を教区

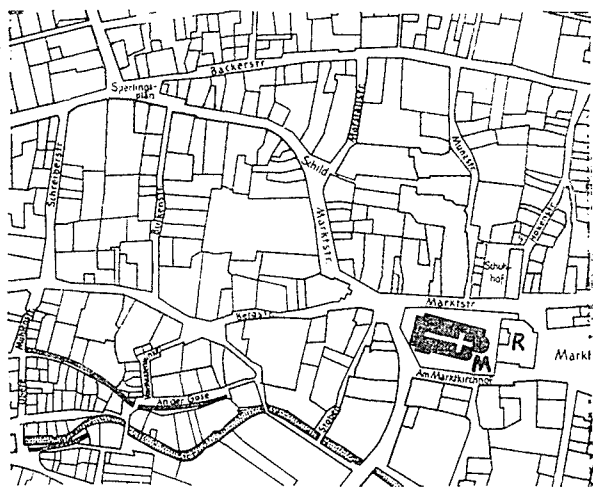
としたといわれるから、すでにここは、北方や東方にひろがっていた付近諸村落の中心であったと思われる。上述のようにすでに九世紀には存在したこの集落の平面形態は、地名や現在の地図から推測するかぎり、余り規則的なものではない。しかしマグヌス教会の創設時には、すでに Ackert-²⁰のある広場が存在していた可能性は強いから、あるいはこの集落は一一世紀までにはすでにこの広場を中心にして先駆的に円村か袋小路村に共通するプランをとり、西のクー通りが、当時の「家畜の道」だったのかもしれない。やがて全域が徐々に市域にとりこまれていく。

しかし円村や袋小路村の原初形態の成立したのが、本地方では一般的に一二世紀以降であるとすれば、それ以前に成立した都市の原核にこうした形態を想定すること自体、無意味なあることではあまい。重要なことは、すでに一〇世紀ころの都市状集落の原核に、後来の村落プランと共通する曲りくねった地割とともに、不定形で、通りぬけのむづかしい広場設置のモチーフがきまって存在していた事実ではあるまいか。

イルメナウ河畔のリュエネブルク Lüneburg²¹ の起源は、

少なくとも一〇世紀に溯る。円錐形の山頂をしたカルクベルク Kalkberg は、早くからブルクに利用され、七九五年には Hilmi の名が初見する。もともと待避のための山城 Fluchtburg であった。九五六年には Lünburg と呼ばれ、旧城の改築と拡大が行われ、その後ハインリッヒ・デア・レーヴェその他のザクセン大公の確保するところとなった。こうした背景のもとに、山麓にはすでに一〇世紀に小街区の形成をみた。現在のミカエル寺院の西方には教区教会があり、かつベネディクト派修道院も九五五年には付近に建てられた。したがって当時すでに広場もあったにちがいない。そこから発するアウフデムメーレ Auf dem Meere 通りの地名は、当時この界限がイルメナウ川の低湿地であったことを示す。小街区はアウフデアアルトシエタット Auf der Altstadt を中心に、北端はミカエル寺院、東はノイエシエトラーセ Neue Straße 通りの西側でかぎられていたと考えられるが、地割は現在もきわめて乱雑で、屈曲が多いから、当時の広場も同様に不整形、かつ北方は行詰りの可能性も大きい。

その後市街は南西にのび、アムジルツヴァル Am Salz-



第十五図 ゴスラールの都市プランの一部
M マルクト教会, R 市庁舎

wallやヒンターデアジルツマウア Hinter der Salzmauerのところに城壁が設けられ、半円状に近い市域の形成をみた。一三七一年以後前記の修道院にかわって創建されたミカエル寺院前の方形広場が、旧街区を不自然にたちぎっているところからみると、現在の広場の方形化も、おそらく

この時期に行われたものであろう。

このブルク集落の南方には、現在のラムベルティ広場 Lambertplatzのところに塩倉庫があり、ザルツ Salz通りのあたりに製塩集落があった。ラムベルティ教会は一三世紀中期の創建。この広場は周囲の街区とともにきわめて無秩序であり、ザルツ通りには、西側に袋状の古い小空間をとどめている。

南部の大大中心ゴスラール Goslar^⑩は、一二三一年にはcivitasと呼ばれていた。市街の原核は市場であるが、市場広場の西側の輪郭はかなりくずれており、付近の小路も不規則に屈折している。長方形の広場や直線状の幅広い街路の形成以前には、この界限が市域の中心で、とくにマルクト通りのシルト Schildと呼ばれる部分は、最古の広場への入口にあたるといわれる。付近は村落状に多岐に発達した形態を示すが、その広場の成立は一〇世紀以前に溯るらしい。

幾何学的な平面形態

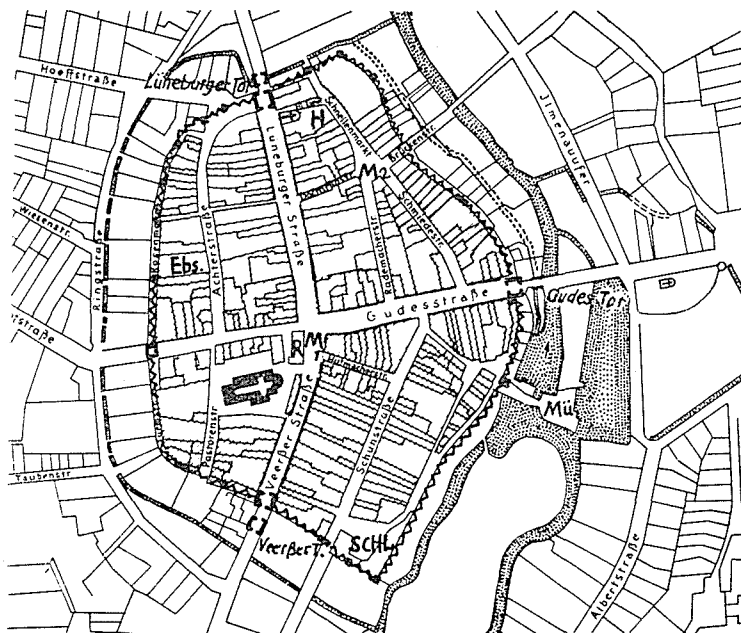
もはや都市と村落において、不定形で、封鎖的な広場を中心とする類似した小コスモスが、連続して「徐々に形成

された」という事実には疑問があるまい。しかしこうした共通のモチーフがいたるところで実現するためには、たんに「徐々に形成された」というにとどまらず、その背後に、特定のモデルプランの存在が予想されなければならない。

いま注目をひくのは、本地域の大・中都市において、一二世紀第二半期以後、新市域に全く幾何学的な広場と街区の形成をみるようになった事実である。以下に説明するように、いずれも方形や円形に近い開放的な広場と、そこを起点とする幅広い直線状街路を特徴とし、その平面形態には定形化が目立つ。これは、われわれの求める当面のモデルとは明らかにちがう。しかし、きわめて計画的なモデルがそのまま地表に刻印されたものであることは明らかである。

前述のブラウンシュヴァイヒでも、一二世紀以降、方形のアルトシュタットマルクト Altstadtmarkt 広場から北にのびたブライテ Breite 通りの東西で、この地方ではもっとも早期の幾何学的街区の発展をみ、その後、一二世紀末期からはより北部にも計画的な都市化が進んだ。ブライテ通りは、その名が示すように、教台の馬車が同時に走れ

るようにとくべつ幅広く計画された街路であり、それに平行して側道が設けられた。同種の通りは、その他の都市にも少なくない^⑤。ゴスラールでも、長方形の市場広場の北側を、ほぼ直線状にブライテ通りが北東に走っている。まさに前代の「小路」Gasse に対して、「街路」Strasse の成立である。「行詰り」と「小路」にかわって、「広場」と「街路」の一体化した幾何学的プランが、居住区画の整形化を伴ったのはいうまでもない。こうしたデザインは、やがて不完全ながら旧市域にまでおよんでいく。そして都市生活は、市庁舎や教会・市場などの集中した広場をコアに動きの多い運動システムを強め、市民意識を高めていった。さらに一三世紀になると、完全に計画的な新都市の創設も進む。イルメナウ河畔のウルツェン Uizen は^⑥、一二六八年、グラーフシュヴェリン Schveilin によって創建された計画都市。北のリエネブルクから南のブラウンシュヴァイヒに至る商業路に沿うこの新都市は、一二七〇年には都市権をえ、レーヴェンヴァルデ Leuenwolde と命名された。湿った森林にある耕地名に因むこの命名は、周囲の原景観を示すものであろう。しかし一二九一年には、ウレセ



第十六図 ウルツェンの都市プラン

M₁ 市場, M₂ 副市場, H ハイリゲガイストシュピタル,
R 市庁舎, 城, Mü 都市水車

ン Uliesen の地名を称することになった。この名はもともと東方二キロメートルにあった古い町名。そこには九七〇年創立のベネディクト派修道院と、市場権と関税権をもつ街区があったが、これらの権利は商人たちとともに新市 nova civitas に移されることになった。理想的な都市モデルを自由に実現し、新しい発展をはかるためには、全く新しい場所をよとしたのであろう。旧市は一三〇〇年後急に下落していった。

この新都市のプランを完全に確めることは、いまでは不可能に近い。一三一五、一六四六、一八二六年の大火によって街並みは変化をこうむったと考えられる。しかしアハテル Achterstrasse 通りとローゼン城壁 Rosenmauer 間に列杭が出土しているから、もとはここに城壁があったのであろう。最古の城壁は一二六九年のもの。新しい都市壁は、一三八一年―八六六年の創設になる。河道の湾曲によって、南半部の街路はやや西方に曲っているが、街路はそれぞれ平行状に走り、両側の屋敷地もほぼ同幅同長。

開かれたヴィスタをもつ方形広場は主要街路の交差点にあたり、一三一五年建造の市庁舎がそのコアをしめ、西南には教会広場に続いて一二八〇年創立のザンクトマリエン教区教会がある。市域の南隅には一三五二年の城があり、また一三二一年初見のハイリゲガイストシュピタルは、北のリュートネブルク門の傍にある。以上のことから、都市壁内のプランは細部をのぞいて、ほぼ都市創設以来のプランを踏襲しているとみてよい。したがってこれは、地形に規定されながら、しかもきわめて幾何学的合理的な都市モデルの実現した一典型といわなければならない。前述の「徐々に成長した」都市形態は、こうしたモデルの未成熟なものであろうか。

しかし本地方には、このような創建都市は、「徐々に成長した都市」に比較して多くない。この都市形態は、どこよりもオスト・エルベ地方の都市の特徴である。とすると、本地方から東方にむかって増加するアングルドルフやシュトラッセンドルフの幾何学的プランこそ、上記のモデルの村落版ではあるまいか。都市の方形広場が方形アングルドルフの、また長方形の街路状広場がシュトラッセンドルフの内

部空間に対応するように思われる。一三世紀にアスカニア家 Askanië によって開拓されたマルクブランデンブルク Mark Brandenburg や一三世紀中葉以降ブレスラウ Breslau 公領に植民されたフリークローグロットカウア Brück-Grottkauer 地方では、それぞれシュトラッセンドルフとアングルドルフが画的に創設され、かつ法定裁判管区ごとに計画的な小都市がほぼ等距離に設けられた事例^⑩があることからしても、これらの都市と村落のモデルの一体性は、ほぼ疑問の余地がない。

円村と袋小路村のモデル

この論法でゆけば、本地方に多い円村の(B)(C)(D)(F)(G)型の内部空間は方形広場の、袋小路村の(A)(E)型のそれは街路状広場の、それぞれ未成熟なモデルの実現とみることができる。小村や列状小村が「規則化した」ばかりの弓状や半円状の内部空間をもつ小村、あるいは円い小広場をもつ三軒屋敷から成長した円村や袋小路村には、アングルドルフやシュトラッセンドルフの広場に特有の公共施設を欠くばあいが多いことも、また必ずしも秩序正しい三圃農業の開花をみなかったことも、広場村としての未熟を示すもの

であろう。村落規模もがいて小さい。すなわち円村や袋小路村は、「徐々に成長した」小都市とその集落モデルを共有したにちがいない。いかにも中世ヨーロッパの農村混合の世界にめばえた居住の雛型に相応しい。

都市広場のモデルが、封鎖的なものから開放的なものへ、また不定形から幾何学的整形へと発展したのと呼応して、村落広場のモデルも、不定形で行詰りのある形態から幾何学的な開かれた内部空間へと発展し、そこに共同生活に必要な教会をはじめ各種の施設を充填していくことになった。この定形広場こそは、ケチュケ R. Kützschke のいうように、「全体を精神的につなぎあわせる媒介点」である。^⑮

東西ドイツの漸移地帯に位置する本地域においては、一二一四世紀の植民にさいして、まず前者のモデルが採用されたのであろう。だから本地域の広場では、都市と村落とを問わず、その平面形態に未熟さが共通してみられるべきが多いのであろう。もちろん一二世紀第二半期以降、新市域に幾何学的な都市広場が形成されたように、南部の農業地帯の一部には規則正しいアンゲルやシュトラーセン・アンゲルの成立したのも事実である。マイペイアの推定に

よると、はじめ円村を形成した村落が、後により計画的なシュトラーセンドルフに変化した事例さえあるという。

- ① 拙稿「古代ライン地帯における國府・キウ・タス・種族國家」『地理学評論』四一（三）。拙著『社会集団の生活空間』所収。
- ② Gradmann, R.: Die städtischen Siedlungen des Königreichs Württemberg. Forsch. z. dt. Landes- u. Volkskde., 1914.
- ③ Schwarz, G.: Die Entstehung der niederrheinischen Stadt. Pöhl, 1951.
- ④ Schwarz, G.: Regionale Stadttypen in niederrheinischen Raum zwischen Weser und Elbe. Forsch. z. dt. Landeskde., 1952.
- ⑤ Keyser, E.: Städtegründungen und Städtebau in Nordwestdeutschland im Mittelalter. Forsch. z. dt. Landeskde., 1958.
- ⑥ Keyser, E.: Plan 2.
- ⑦ Keyser, E.: Plan 3.
- ⑧ Keyser, E.: Plan 4.
- ⑨ Keyser, E.: Plan 5.
- ⑩ Keyser, E.: Plan 10 a.
- ⑪ Keyser, E.: Plan 10 b.
- ⑫ Keyser, E.: Plan 37.
- ⑬ Keyser, E.: Plan 35.
- ⑭ Keyser, E.: Plan 34.
- ⑮ 矢守一彦「都市史における広場——とくにドイツについて——」（『生産の歴史地理』歴史地理学紀要一二）。
- ⑯ Keyser, E.: Plan 26.
- ⑰ Kuhn, W.: Planung in der deutschen Ostiedlung. Historische

Raumforsch., 1, 1956.

② Köttschke, R.: Ländliche Siedlung und Agrarwesen in Sachsen. Forsch. z. dt. Landeskd., 77, 1953.

六、おわりに

棚でかこまれた弓状や半円状の空間にそう小村プランは、既述のように、粗放な穀草農業を共同でいとなんだ古いヨーロッパ世界に内在する要求に応じて成立したものであろう。しかしこの垣内空間が円村や袋小路村にみる封鎖的な内部空間に発展する契機としては、おそらくフォーラムをもつローマタウンのプランを受けつぐフランクの世界に胚胎した、いかにも中世的な集落モデルがあったにちがいない。

ただライン川流域などのフランク植民地には、その他に計画的な列状小村のプランもみられるが、これは中世の森林開拓地や湿地干拓地における林隙村や湿地村モデルへと発展したと考えられる。この発展系列を度外視するかぎり、円村や袋小路村より発展したモデルというべきアングルドルフやシュトラールセンドルフにおいて、はじめて円形・正方形・長方形・ランセット型など、さまざまな幾何学的デ

ザインをもつ広場があらわれた。これらの大型広場村こそ、村落における「原ブロック様式」というべきものであろう。すでに西・南ドイツの一九世紀の地籍図上にも、アングルドルフやシュトラールセンドルフが散見し、さらにいままでも古い成立になるといわれてきた塊村の中にも、よくみると不規則な広場状空間をもつものが少なくない。しかしこれらが、もとの袋村の内部空間が無秩序に変形したものであるのか否か、あらためて形態発生学的再検討をこころみなければならぬ。ただ当面、円村や袋小路村をはじめ各種の広場をつけた村落モデルの大規模な現実化は、エルベ川流域以東における後期中世以降の植民をまたねばならなかったというべきであろう。

その形態は、ヨーロッパ特有の農牧混合様式の発展に十分対応しうるとともに、この地方に独特の合理精神の客観的な展開過程そのものでもあった。広場を焦点として、棚や、ときに環濠で周囲をかざられた、堅牢で固定したその村落は、焦点と限界のとかく流動的な日本の村落とは相違がはなはだしい。

John Bright and the English Labour Movement

by

Akira Nakamaya

John Bright has generally been appreciated in that his political behaviour was not concerned with his expediency, but with his moral principles, and he has also been called a "through-going democrat". However, we cannot necessarily accept these evaluations as being correct, when we examine in detail his fundamental idea about labour movements in the periods of the Anti-Corn Law Movement, especially during the times of the Second Reform Movement, and his way of coping with them.

It is a widely-known truth that he was a leader of the Manchester School, and consequently, it will not be necessary to emphasize here that the object in politics which he was most interested in, was to establish the political supremacy of the industrial bourgeoisie. At the same time, we cannot ignore that he tried to conciliate the labour movement through his intentional concessions to the demands of the working-class, and also by including a part of the working-class in the "pale of the Constitution". Thus, he intended to establish the political supremacy of the industrial bourgeoisie, and to consolidate the basis by which the preservation of property would be secured.

This paper aims to inquire about the characteristics of the bourgeois reformism in England in the middle of the nineteenth century, through the study of the above-mentioned.

Rundling and Sackgassendorf in the Basin of the

River Elbe in the Middle Ages

—about the Standpoint of the European Villages—

by

Ichirô Suitsu

In Europe there is a public aquare found in villages as well as cities. In the basin of the River Elbe there are many Rundling and Sackgassen-

dorf which have deadlocked dimensions with a single entrance. According to the history of study of these villages, the theory of Slav origin is of undercurrent; but as a result of studies in morphogenesis adding some examples in Northern Europe and England, we find it clear that

(1) they are small ones in which a few houses are situated, in origin, at the end of the circular dimensions with fences around.

(2) The dimensions within fences are indispensable to the grazing world for the purpose of defence and protection for livestock at night.

(3) In former times they are widely distributed in at least every part of Europe as well as in the Slav region.

What is the cause of these small villages developing into Rundling and Sackgassendorf? I think it important, though it has not largely been considered, that the existence of a city model corresponding to a village one can generally be anticipated.

(1) In Rundling and Sackgassendorf is a common motif to some small cities like burg before the 12th or 13th century with blocked and indeterminate squares. But on the other hand,

(2) in Ost-Elbe Angerdorf and Strassendorf hold the same geometrical design in common as the similar established cities in the 13th century do. And

(3) in Rundling and Sackgassendorf they rarely have the regular threefield system like Angerdorf and Strassendorf. These facts indicated that

(4) the former may be thought to be formed on the basis of the model plan preceding the latter. Various village squares, strange in Japan, were established as a combination of immanent require in the mixed world of agriculture and pasturage with motif of city squares since Roman towns, and became the core of various village forms.